

巻頭
メッセージ

大野和士

Kazushi Ono Profile

1960年東京生まれ。東京藝術大学卒業。
1987年 イタリア「アルトゥーロ・トスカニーニ国際指揮者コンクール」優勝
1990～96年 クロアチア、ザグレブ・フィルハーモニー管弦楽団音楽監督
1992～99年 東京フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者を経て、現在同楽団桂冠指揮者
1996～02年 ドイツ、バーデン州立歌劇場音楽総監督
2002～08年 ベルギー王立歌劇場（モネ劇場）音楽監督
2008年 フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者に就任



ミラノ・スカラ座、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場、グラインドボーン音楽祭、ベルリン・ドイツ・オペラ、パリ・オペラ座バステュー劇場など世界に名だたる歌劇場、音楽祭への出演を果たし活躍を続けている指揮者、大野和士さん。2008年9月には、日本人として初めてフランス国立歌劇場の首席指揮者に就任しました。

大野さんの演奏会では、知られざる名曲や現代の作品が積極的に取り上げられています。その背景には、常に音楽と真摯に向き合い、作品を徹底して研究し理解しようとする姿勢と、作品の魅力を少しでも多くの人たちに伝えたいという、音楽への深い愛情が感じられます。歌い手や楽器奏者、スタッフの方たちとのコミュニケーションは、各国の言葉。自分の思いを具体的に伝え、世界を舞台に音楽がつくられていくのです。

主に海外で活躍されている大野さんですが、公演のために帰国する度に小児医療センターや、養護施設などで小さな音楽会を開くというボランティア活動を行っています。

デビュー直後に活動していたザグレブ（旧ユーゴスラビア）は、当時内戦下。灯火管制のさなか、ひっそりと演奏会場に足を運び、むさぼるように音楽を聴き入る人々を目の当たりにした経験が、音楽の本当の力を知るきっかけになったと大野さんは語っています。

コンサートホールに足を運べる人たちだけではなく、子どもたち、音楽から遠ざかっている大人、様々な理由で音楽を聴く環境にない人…。大野さんは音楽のもつ力を信じながら、そのような多くの人々に音楽を届ける活動を続けられています。

**音楽そのものは
言葉を越えた世界へと解き放ってくれるものです。
しかし演奏者の表現を引き出したいときなど、
言葉は一つのきっかけになります。
言葉によって、心の窓が開くことがあります。
自由になること、それがとても大切だと感じます。**

**公演の
ご案内**

[大野和士 指揮]

フランス国立リヨン歌劇場管弦楽団

Bunkamura 20周年記念特別企画

○マスネ：歌劇『ウェルテル』全4幕（フランス語上演／日本語字幕付き）

オペラコンチェルト形式（演奏会形式）

2009年11月1日（日）、3日（火・祝）15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

お問い合わせ：Bunkamura 03-3477-3244（10:00～19:00）

<http://www.bunkamura.co.jp>

○子どもたちに贈るスペシャルコンサート

ドビュッシー：『牧神の午後への前奏曲』

ストラヴィンスキー：『火の鳥』＊この公演は小学生・中学生・高校生が対象となります。

2009年11月2日（月）19:00開演 Bunkamura オーチャードホール

お問い合わせ：Sony Music Foundation 03-3261-9933（月～金10:00～18:00）

<http://www.smf.or.jp>

特集

移行期の音楽授業

授業者に訊く

新学習指導要領への移行期に入り、数か月が経過しました。
各学校では具体的な実践が積み重ねられていることと思います。
——これからの授業をどのように変えていけばよいのか？
移行期に入ったばかりの平成21年度1学期、実践の現場を訪ね
先生方から直接お話を伺うことができました。
今回の特集では、「授業者に訊く」「私の指導案・指導計画」を
拡大してお届けいたします。



授業者に訊く ①

路面電車が数多く走る街、長崎市を訪ねました。

1年生の子どもたちが、「けんけんぱ」のリズムを感じて、
自分たちのリズム表現を工夫していく実践です。

オブザーバーである副校長の嘉松先生からもお話をいただきました。

授業者：山口亮介

長崎大学教育学部附属小学校

本時の授業の 位置付け

今回の授業の題材は、広く知られている遊び歌を用いて、リズムのおもしろさに焦点を絞った「音楽づくり」です。指導計画は全2次6時間からなります。

本時は、第2次「けんけんぱ（からだ遊び歌）」(3時間)の第3時です。4小節からなる「けんけんぱ」のリズムをどうしたらかっこよくつくれるか、言葉と身体表現のおもしろさを参考にして、子どもたちが最後の小節にふさわしいリズム表現を試行錯誤しながら工夫していきます。

授業の流れ

	学習活動	確認事項や留意点
導入	1. 既習の遊び歌「まねっこあそび」と「でんでらりゅう」を楽しむ。 2. 「けんけんぱボード」で偶然にできたリズムのおもしろさを楽しむ。	・ リズム模倣の楽しさや、速さの変化によるおもしろさを感じ取る。 ・ 音楽づくりへの意欲をもたせる。
展開	3. 班で「けんけんぱ」をつくる。 ・ 「けんけんぱ」をつくるイメージをもつ。 ・ 「けんけん」「けんぱ」「ぱ」のボードから好きなものを選んで「けんけんぱ」をつくる。 4. 「けんけんぱ」を発表する。 ・ 班ごとに比較する。 ・ 終わり方について考える。	・ 並べてよいのは、4枚までとする。(4小節のリズムを創作させる) ・ 声にだして選ばせる。 ・ 最後をかっこよくきめることをうながす。 ・ 手拍子や歌ったりして、二拍子の拍感やリズムを感じて表現する。 ・ 班ごとの表現をまとめる。 ・ 最後が「けんけん」で終わっているパターンと4枚とも同じものを選んだパターンを比較させ、終わり方を意識した表現ができるようにする。
まとめ	5. 結果をもとに、最後の終わり方を意識して、「けんけんぱ」をする。	・ 終止感のある表現ができるようにする。

低学年の音楽づくりで育てたいもの

聞き手 ヴァン編集部

Vent: 音楽づくりを通してどのような力を育てたいとお考えでしょうか？

山口: 音楽づくりの活動でも、思いや意図をもって表現することができる力を育てたいと考えています。低学年では、遊びの中にあるわらべ歌や遊び歌がもつ即興性や創作性を使って、音楽づくりの活動を進めています。本時は、即興的に遊びの中でリズムをつくる活動や、4小節の中でリズムを入れ替える活動を行いました。そのことが、これから先に行われるふしづくりの活動につながると考えています。今日の授業で使用した小節ごとに色分けをした「けんけんぱボード」も、後々は音楽の構成に気をつけて考えていく際の手だての一つになるのではないかと考えています。

V: リズムづくりは、ある程度始められているのですか？

山口: 本題材から、即興的な表現としてのリズムづくりに取り組んでいます。4拍子の拍の中で自由にリズムをつくり、問いや答えを表現する活動を行っています。このような活動を重ねることで、子どもたちは4拍子にあうリズムを身につけることができると考えています。

V: 「けんけんぱ」ですが、「終わり方がカッコいい」ということについて、先生と子どもたちの思いに少しズレがあるように感じましたが…。



山口: 「カッコいい」終わり方を、「ポーズがとりやすい」終わり方ととらえた子どももいました。教師の意図としては、終止感を意識した終わり方をねらっていました。例えば「けんけん」だと次に続くような不安定な感じがします。「タンタン」よりも「タン・」のほうが終わった感じがするのではないかと考えました。

V: 結果的に、子どもたちは3種類の終わり方を選んでいましたよね。

山口: 音楽づくりの活動に限らず、鑑賞活動を通して、子どもたちが気づくということを大切にしたいと思っています。本時の学習でも、子どもたちから多様な表現が出ていました。時に子どもたちの表現が、教師が意図する表

現とは違ったよさをもつものであることもあります。大切なことは、思いや意図をもって表現し、それを聴いて確かめることだと思います。

V: 本時は「けんぱ」のリズムを選択し工夫するという音楽づくりでしたが、低学年から中学年へとつないでいくために、どういう系統性を想定されていますか？

山口: 今後は、楽器の音色に気をつけて、音を選ぶ音楽づくりの活動を行っていきたいと思っています。段階的に、2音、3音のふしづくりを行い、中学年ではリズム以外の音楽を構成する要素を入れていくことを考えています。低学年では、子どもたちが遊びの中で自然と身体を動かしながら体感できる



●やまぐち・りょうすけ
長崎大学教育学部附属小学校教諭

ようなかたちで進めていくことがよい
と考えています。

いろいろな音・音楽との出会い

V：先生のピアノ伴奏の工夫、音色が
とてもすてきでした。即興ですか？

山口：即興です（笑）。

V：いいですね！動きに合わせて先生
が伴奏してくれることで、子どもたち
は、言葉や動きと同じに音楽も感情や
イメージを伝えることができると、気
づくのではないのでしょうか。

山口：授業では、教師が提示する音で、
子どもたちがいろいろな表現のよさを
感じ取ることができるように心がけて
います。ピアノ伴奏もそうですが、教
師がいろいろな表現を提示すると、子
どもたちはそれを敏感に感じ取って表
現します。

V：締めくくりにトーンチャイムを用

いたのも…。

山口：ええ、柔らかな音の響きや、重
なったときの音の美しさも意識させたい
ので。

V：低学年だと、リズムが際立つものを
強調しがちな印象があります。

山口：もちろん、躍動的なリズムの表
現も大切ですが、そればかりでなく、
優しいレガートの表現や、*pp*の表現
なども感じてほしい。遊びながらも聴
く部分はしっかりと聴いて表現する。
そのためには、いろいろな音楽のよさ
に触れることが大切です。そして、自
分の中で感じた思いや意図を表現にし
ていけるようにしていきたいと思っ
ています。

拍を感じる

V：低学年の場合、どうしても拍の流
れを感じ取ることが甘くなりがちに思
われますが、そのあたりはどうお考え
でしょうか？

山口：遊びの中で拍を感じ取っていく

場合、拍が甘くなることはあります。

拍がしっかりとれなかったり、どん
どん速くなったり。モデルになる子
どもたちの表現を聴いたり、教師が
一緒に拍を打ったりして、できるよ
うにしていかなければいけませんね。

V：子どもたちの動きを見ていて、
休符の在り方を考えさせられました。
休符を次へ進むためのエネルギーと
して感じる事ができれば、もっと
拍に乗れるかと…。

山口：そうですね。身体表現を伴う
ことで、休符を感じやすいのではな
いかと思います。今回の授業では、
動きの流れの中に休符が存在しまし
た。授業の中で、休符は「止まる」
という感覚をもっていた子どもが多
かったようです。今回の授業を通して、
休符を次へ進むためのエネルギーと
して感じ取ることができるように、
動きの中でもより意識できるよう指
導することが必要だと感じました。



年度末の公開授業に向けて～嘉松弘一郎副校長からの提言～

オペレッタをつくろう！

本校は来年の2月18、19日に実践研究の発表として公開の授業研究会を予定しております。今後はそれまでの授業をどのように構想し、計画的に展開していくかが重要になります。私はそれまでに、子どもたちが自然に動き出すようなピアノ演奏を山口先生に完成させてもらいたいと思っています。極端に言うと、「山口オペレッタ」をつくりたいのです。今、子どもたちは体操座りです。ぴしっと並んで、前にならえをして。それは山口先生が弾いたあの曲のイメージではないのです。最後にわずかなリタルダンドから *pp* で、すーっと座る。ふわっと花びらが地面に落ちるように。そういう音楽を先生は提示しているはずなので、「こう座れ」「こういうふうに集まれ」ではなくて、子どもたちがピアノの音を聴いて自然に集まり、音楽に合わせてふわっと座るようにしなければいけないと思うのです。

オペレッタのつくり方のヒントとしては、変化のある音楽の提示ということがあります。例えば、雷鳴のような音を入れます。そうすると、平和でのかだただけのふしに、一つの緊張感が生まれます。低いトリルを入れたり、不協和音をボンと鳴らしたり、非常に高い金属的な音を入れてみるなど。いろいろな音楽と言葉とのコラボレーションで、「おや？」とか「あれあれ？」などを子どもたちに提示するのです。それによって、子どもたちはその次にどういう物語をつくるか、音楽と言葉を少しずつミックスさせながら、自分たちの表現を生み出していきます。雨がざーっと降り出したり、雨宿りをするために逃げ回ったり、モンスターが来たぞ、などというふう遊ぶのです。つまり、「集まれ」といってただ集まるのではなくて、子どもたちと一緒に今度はどんな遊びができるかを考える活動、いわば音による遊びなのです。

毎日同じことの繰り返しでは遊びではなくなります。そのため、子どもたちがいろいろな表情をするのを先生が見つけて、評価をします。音にどういうふうに反応してどのような動きを見せたかという結果を、毎回音楽で示していくのです。そういうことを続けていけば、最終的には45分のオペレッタになっていくのではないかと考えています。

遊びにはルールが必要

今日の授業の中で、子どもたちがつまづいたのは、やはり拍です。「けんけんぱ」は、動きは同じでも、拍に乗れない場合もあります。たとえ遊びであっても、ルールがなかったらおもしろくありません。つまり、うまくできたという実感がなければいけないということです。これ見よがしに「お前

●かまつ・こういちろう

長崎大学教育学部附属小学校副校長



ダメや」と言っても前に進めないの、うまくできなかった場合には「残念やったね、もういっぺん」と言う子どもはどうすればいいのか考えるようになります。そこに困難というものが生まれて、それが難しいものに挑戦したいという子どもの意欲につながるのです。

先生が次の指示を出さなければ、子どもの活動はずっと続きます。終わることができないのが子どもです。終わるというのは、「ここまでできた、さあ次に新しいレベルに挑戦しよう」ということなのです。そしてまた次に続いてゆくのです。そういう質の変化のある連続性を上手に子どもたちの活動の中に入れていきたいものですね。

楽しい・美しい・発展性がある

小学校段階の音楽には大切なことが3つあると考えています。それは、「楽しいこと」「美しいこと」、そして「発展性があること」です。楽しいことは、下手でも楽しめます。ところが、美しいことは上手なほど味わうことができるのです。また、発展性があるというのは同じことの繰り返しではないということです。易しいものをいくら繰り返しても発展はありません。子どもたちはそこに一つも喜びを感じないのです。何回もひっくり返って、汗をかくのは楽しいことです。みんなと一緒に手をたたいたり、声を出したり、跳んだりすることは楽しいでしょう。でもそれだけでは満足できません。なぜなら人は美しさというものに触れたいからです。美しさは厳格なものです。拍というものは厳格でなければなりません。その厳格なものに自分が合わせられるかどうか大切なのです。拍のもつ厳格さは規律です。その中でどのようにみ出そうとするかということが個性につながります。「トントントントン」とずっと続けていると、「トントントントン」とだれかが変化をつけてみたくくなります。みんなとは違っていても、拍という規律の中での変化だから違反ではない。それを聴いた子どもたちがリズムの変化を見いだし、おもしろがって、「トントン・トントン」とまたちょっと違ったリズムを生み出していきます。拍という規律の中でいかに自由な表現をしていくかということなのです。こうして、美しさや発展というものに子どもたちをどんどん導いていきます。

ぜひとも2月の発表会に向けてそうした系統性を考えていてほしいと思っています。

授業者に訊く ②

幕張ベイタウンに位置する美浜打瀬小学校は、街と一体化されたオープンスクールとして特色ある建築をされた学校です。2年生の授業では、替え歌からはじまり、音楽遊び、身体表現など音に親しみながら、豊かな音楽活動を展開していました。

授業者：紫雲友紀子

千葉市立美浜打瀬小学校

本時の授業の位置付け

今回の授業の題材は「自分たちの豊かな音楽表現をつくる」です。指導計画は全3次8時間で構成しています。

本時は、第1次「音とイメージを結び付ける」(3時間)の第3時「音色や音の動きから、音がもつイメージをつかむ」です。音楽遊びの活動を通して、子どもたちが絵の中の「玉」の様子を身体表現でとらえながらイメージを膨らませ、音で表現することをねらいとしています。

授業の流れ

	学習活動	確認事項や留意点
導入	1.『大きな歌』の替え歌を歌う。	・歌詞に合った表現の工夫を思い出させるようにする。
展開	2.音楽遊び“にんぼう おとなる” ・音を聴きその音の特徴(音色、音の動き)をとらえて自由に身体表現をする。 3.絵本『ころころころ』の絵を見て、玉の動きを身体表現する。 ・平面をころがる様子 ・山を上って下りる様子 4.絵の表している状況に合う音をみんなで探し、音で表現する。 ・みんなで意見を出し合って表現をつくる。 ・音に合わせてもう一度身体表現をする。	・ウッドブロック、シンバル、大太鼓、トーンチャイムを強弱や速度の変化をつけて鳴らす。 ・絵の特徴をよく表している子どもをほめ、みんなに見せる。 ・身体表現でとらえたことを生かせるようにする。 ・表現することへの抵抗感をもたせないようにする。
まとめ	5.学習カードに記入する。	・自分の思いをカードに書かせるようにする。

イメージから音楽表現が広がる

聞き手 ヴァン編集部



編集部

音楽活動を豊かにする言葉

Vent：紫雲先生と子どもたちがとても生き生きと取り組まれているのがいちばん印象的でした。授業の展開も非常にスピーディーですね。それにしても子どもたちはユニークな言葉で音楽のイメージを表現しますね。

紫雲：昨年、1年生でこの授業をしたときには、「ぐにゃぐにゃ」などもっといろいろな表現が子どもたちから自然と出ていました。今日授業をした子どもたちは、1か月ほど前から授業をもたせてもらい、本題材では3時間目になります。

V：言葉を大事にするというのは、学校全体で取り組まれていることなのですか？

紫雲：そうです。

V：教室の掲示物では、楽器や曲のイメージが“どれみふあ・マンション”“にんぼう おとになる”などと表現されており、子どもの日常と関連するような発想の豊かさを感じました。“おんがくのたからばこ”（P.14写真参照）として「つよく、よわく、つなげて、やわらかい、やさしい」などの言葉がありますが、これはふだんの授業でも意識されていることですか？

紫雲：はい。これは子どもたちから出てきた言葉なんです。替え歌遊びをし

たとき、『大きな歌』の「大きな感じを伝えるためにはどうしたらいいだろう？」と問いかけると、子どもたちは「強く歌ったほうがいいよ」と答えました。そして、次に「おおきな」の部分の歌詞を消し、「なんという歌詞が入るでしょうか？」と投げかけ弱く歌うと、子どもたちは「静かな歌」「弱い歌」「小さな歌」と答えました。歌い方を変えると、子どもたちは「曲の雰囲気が違うね」と感じ取ることができるのです。「ゾウガメさん」は遅くゆっくり、「ふんわり」はやさしく、ゆっくり、やわらかく、「ぼつぼつ雨」はスタッカートで切って、「あわてんぼうさんのうた」は速く歌ったほうがよい、というように言葉から曲想をイメージする替え歌遊びを前時に行いました。互いに歌詞を替えた部分を隠して歌い、隠した歌詞を想像させると、子どもたちは歌い方から歌詞の内容をイメージしようとしていました。でも、まったくゼロのところから考えるのではなく3択にして、曲の特徴から歌詞を選べるようにしました。音楽をつくるときは、曲想を特徴づける要素を取り入れていくと、さらに音楽が豊かになることを歌詞から学びました。

V：紫雲先生のオリジナルなのです





●しうん・ゆきこ
千葉市立美浜打瀬小学校教諭

→P.36 年間指導計画の資料もご協力いただきました。

か？

紫雲：そうです。速度や強弱などニュアンスの違うものがいろいろあったほうがよいので、歌詞を選ぶのが難しいです。

V：これだけたくさんの楽器や音素材への子どもたちの関心の高さには驚きました。楽器の名前もよく知っていましたね。

紫雲：楽器にはひらがなで名札を付けて、見ながら覚えていってもらうようにし、音楽室楽器探検の活動を1時間設け、楽器に自由に触れて（使用上のルールは決めておく）、気がついたことや好きな音やその音の出し方などを紹介し合うようにしました。

V：子どもにとってよい学びの環境ができているのですね。今日のクラスは、ふだん学級担任の先生が授業されてい

るのですか？

紫雲：はい。担任の先生に伺ったところ、どうしても歌唱と鍵盤ハーモニカ中心の授業になってしまうということで、音楽づくりに対して教師が抵抗を感じているようです。

V：なるほど。では、紫雲先生ご自身は、子どもたちがもっている視点と音楽を結び付けさせることからスタートして、中・高学年でどのように発展させていこうとお考えでしょうか？

紫雲：中学年では、いろいろな楽器と合わせていきます。4年生では社会科で「水」について学習するので、水のいろいろな状態についてのグループ創作を考えています。“ドレミしりとり”などをして、旋律づくりも少しずつ覚えさせていくつもりです。高学年では、旋律とそれを引き立てる音や楽器について取り組んでいこうと思います。

V：楽器の奏法については？

紫雲：そうですね、大太鼓という子どもたちは大きな音が出ることを予想しているので、たたき方を変えて弱く静かな音を出すと驚きます。奏法によって様々な音が出ることを感覚的にとらえたうえで、自分の求める音が出せるように技能も高めていきたいと思っています。

学び合い高め合う

V：本時の中で、音を体で感じ取る活動のときに紫雲先生が「いい動き」とおっしゃいましたが、その際どのような観点で見ているのかが少しわかりにくかったのですが…。見本を示すと、

子どもたちが同じ動きになってしまったところが難しそうですね。

紫雲：どのように表現したら（動いたら）よいのか、まったくイメージできない子どももいるので、「まねしていいよ、それをヒントに自分で考えればいいよ」と言うようにしています。音を体で感じ取る活動を取り入れるのは、音をよく聴く耳を育てるため、そして音を感覚的にとらえ、これからの表現活動に生かすことができるようにするためです。また、心身ともに解放された状態をつくり出すこともできます。ですから、エクササイズ感覚で、授業の始めにいくつかの活動を取り入れています。

V：高学年になるほど、子どもが発言しなくなる学校も多いようですが…。

紫雲：恥づかしさが出てくるからでしょう。しかし、今までの経験からすると、低学年のときからこうした活動を行っている、高学年になってもこのびのびと表現します。

V：何でも言える、どんな動きでも許されるという雰囲気づくりが重要ですね。

紫雲：子どもたちがある歌を歌ったとき、「やりたいように表現していいんだ」「私はこう感じたんだから友達と違っていいんだ」と思ったならば、それを認めてあげるようにします。そして、お互いの考えや表現を認め合いながら、みんなで意見をまとめてひとつの演奏をつくっていくことが大切です。

V：鑑賞とはどのようにリンクさせ

ていらっしゃいますか？

紫雲：例えば、6年生の教材『銀河鉄道の歌』で自由な発想で音楽づくりをするときは、その前に『木星』を鑑賞したり、それ以外の『火星』や宇宙に関連した映画音楽などを聴いたりしました。すると「この部分では星がくるくるまわっているように聴こえた」などいろいろな感想が出て、それらを自分たちの音楽のヒントにしていました。逆に、自分たちの音楽をつくったあとに鑑賞すると「同じことを大作曲家もやっている！」という発見があったりして、鑑賞と表現を重ねてしていくことで、耳が鋭く育っているように感じます。

V：記譜についてはどの段階から取り入れていますか？

紫雲：低学年のうちは行いません。中学年でもあまりやりませんね。ただし、私が旋律を書き留めて記録として残すことはあります。

——ここに昨年の資料があるのですが、子どもは記譜できないので、楽譜の代わりに、こんなものをつくりました（資料を示す）。教芸の1年生の教材『はる なつ あき ふゆ』を基にした活動です。子どもたちが季節ごと4つのグループに分かれて、歌からイメージしたそれぞれの季節の絵を描いて、その絵から簡単なお話を考えて音楽づくりをしました。例えば“なつグループ”は「くじらが向こうからやってきて、2回ジャンプして帰る」とか「深いところでお魚が遊んでいるのに、くじらが蹴散らしてしまう」などです。

子どもはとてもおもしろがって、たった8小節の短い曲でも歌詞の背景までイメージし、絵に描き音で表そうとします。グループ全員の絵を基に音楽をつくっていくので、子どもは表現の中に自分の発想が取り入れられたという満足感を得て、積極的に参加し活動します。そして、ひとつの音楽として子どもが共通理解し演奏する段階で、やはり楽譜が必要になりました。しかし、楽譜はまだ書けないので、私が子どもの話を聞いて資料のように大まかに音

楽の流れをまとめました。例えば「なみがきらきらひかっている」「くじらがもぐって水がとぶ」「だんだんとおくにかえる」などです。そして「あなたたちが使う楽器は何？」と聞いて、そこに楽器名を入れていきました。また、音楽づくりの授業では、グループや個々に合ったアドバイスの必要となるのですが、同時に全員にはできません。そこで、資料の中に、「近づいてくる感じを出すためには音をどうしますか？」などの質問を書きました。



子どもはその質問を自分にあてられた手紙と思って読み、表現を工夫していくのです。教師がこんな要素に気づいてほしいと思うアドバイスを問かけをしていくことで、1年生でも、表情豊かですてきな音楽をつくることができました。

V: 音楽づくりは、手間暇がかかっているのですね。それに先生の感性も反映されてくるように感じました。

紫雲: そうですね。自分を磨かなければいけないと感じます。

V: 固定観念をもつ大人よりも、子どものほうが、柔軟なものの見方をするのでしょね。

紫雲: 夏休みの宿題で1年生に、「夏の音を見つけてこよう」という課題を出したことがあります。すると「〇〇の音を聴いたら〇〇に聴こえたよ」というように、とても音に敏感になります。音楽づくりに取り組む前の段階だったのですが、身近な音に耳を傾ける習慣をつけることは大事だと思いました。同じ音を聴いてもよりイメージが広がるようになり、『かつこう』を歌うときに「頭の中で絵を描いてごらん」と言うと、「やさしく歌ったほうがいいよ」と子どもが言ったこともありました。

授業はどう変わる?

V: 今年度から移行期に入りましたが、新たに課題として取り組んでいきたいことなどがありましたら教えてください。

紫雲: 昨年ころから、研究会に行くと、

いかにも「共通事項を教えます」という授業が多くて、とても不自然に思いました。私は、子どもに「こう演奏しなさい」と教え込むのではなく、「こうしたい」という子どもの思いを大切にして表現

させるようにしています。速度や強弱についても、子どもなりの言葉で表すことができます。もう少し学習が進んだ段階で、「先生、これって速度のことだったんだね」などと気づくようになればいいと思うので、今は自然な形で、子どもの発想や言葉のまま、音楽を特徴づける要素を“おんがくのたからばこ”の中にためています。そして、たからばこの中ではそれらを要素ごとに色を変えて整理しています。また、いろいろな音に親しんだり音楽のしくみを感じたりするような、遊びながら学ぶ活動を授業の中にたくさん取り入れています。遊びの要素が入ることによって、子どもたちは自由に発想したり発言したりします。意見が対立することがあっても、音楽を越えたところでの人間づくり、学級づくりにも役立っている感じがします。そうしたことが、子どもが思いや意図をもって音楽を表現することにつながると考えています。

V: 年間指導計画の中でバランスの変化はありそうですか?



紫雲: 今回のように、音楽づくりを大きく扱うのは年1回程度です。しかし、他の教材の中でも子どもの発想を生かした簡単な音楽づくりを行います。例えば『虫のこえ』を歌うと、子どもには自然に歌詞の情景が見えてくるようで、「風が吹いて草を揺らす音楽をつくろう」とか、歌に出てくる虫の声をリズムで表現し、即興的にリズムアンサンブルをしようということになります。今までの学習や音楽遊びで得たものを生かす時間が生まれるのです。

V: 指導計画に表れない計画もあるのですね。さきほどの“おんがくのたからばこ”というのは、子どもの言った言葉を先生が少しずつ音楽的な表現にしてフィードバックするという、そのための“たからばこ”なんですね。

紫雲: ええ、子どもが「先生、もっとためたいよね、宝石がピカピカしているみたいに、もっときれいな音楽になるよ」って言ったときには、ちょっと震えましたね。

授業者に訊く ③

小学校の3校目は東京23区の北西に位置する練馬区を訪ねました。
5年生の鍵盤ハーモニカによる『威風堂々』の旋律奏が授業の核となりますが、
題材には低音や和音の学習、読譜、歌唱とも関連が図られています。
オリジナリティあふれる言語活動を取り入れながら、
子どもたちが生き生きと取り組んでいました。

授業者：澤 雅枝

練馬区立光和小学校

本時の授業の位置付け

本時は、指導計画【音の重なり】(2部構成12時間扱い)の1「低音の魅力」(4時間)に続く2「和音の魅力」(8時間)の4時間目に当たります。

低音の学習ではヘ音記号について学ぶと同時に、鑑賞の活動を通して、旋律に低音が付くことによって音楽がどう変わったかを感じ取りました。

続く和音の学習では、まずトーンチャイムを活用して響き合う音を見つけ、旋律にはそれに合う和音があることを学びました。本時では、『威風堂々』の旋律の曲想を感じ取って、鍵盤ハーモニカで演奏できるようにし、豊かに響き合うことを目指した合奏へと発展させていきます。

高学年の学習で音楽表現の喜びを味わうために、5年生のこの時期に響きの美しさや厚み、深みの魅力についてきちんと学習させ、2年間の学習の基礎を築きたいと考えています。縦と横の音の絡み合うテクスチャの学習へとつなげていく計画です。

授業の流れ

	学習活動	確認事項や留意点
導入	1. 今月の歌を歌う。	
展開	2. 前時まで学習した低音や和音について振り返る。 3. 『威風堂々』を鍵盤ハーモニカで練習する。 ・楽器で練習する前に階名唱する。 ・リピート記号の読み方を復習する。 ・楽器を使って自由に練習する。 ・レガートで演奏できるように練習する。	・「同感 なるほど 納得」など挙手させ、低音や和音の魅力について確認し合う。 ☆自分の力で読んで歌える、つかえるけれど歌える、ヒントを使って歌える、暗譜で階名唱できる。 ☆指使いはわかる、ゆっくりなら吹ける、つかえるけれど吹ける、指使いを守って吹ける、吹ける。 ・レガートについて再度確認する。 ・指使いについて意識させる。 ☆なめらかな表現になるよう工夫して演奏している。(表現観察・聴取) ☆友達に教えることができる、友達に教えてもらってできる。
まとめ	4. 全体で演奏する。 ・この次にどんな楽器を使って合奏するのか、楽譜から確認する。	・曲の前半をレガートに気をつけて演奏する。

〔共通事項〕で深まる音楽の魅力

聞き手 ヴァン編集部

苦肉の策の指導計画づくり

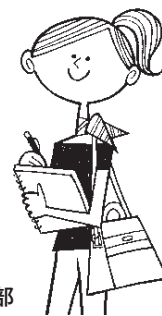
Vent: 本題材には12時間という多くの時数が充てられていますね。

澤: 「低音」と「和音」に焦点を絞り、このような題材構成にしました。これまでは「音楽発総合」といった形の授業もありましたが、今年度は高学年の場合、きっちり50時間しかありません。その中で、行事にかかわって22時間も取られてしまいますので、今まで以上に学んだことが生きて働くような場を設定し、価値あるものへとつなげていくことが重要な課題となっています。

題材内容が行事にうまく組み合わせるように、既習曲を生かすような計画にしました。例えば卒業式では、『旅立ちの日に』の1番を5年生、2番を6年生、そのあとは2学年で掛け合いにして歌いますし、入場の際は『威風堂々』を合奏したり、退場の音楽をアレンジして演奏したりします。苦肉の策として、行事とうまく絡ませながら年間指導計画における各題材の時間配分を工夫しています。

V: 学校や子どもの実態に即して、メリハリをつけざるを得ないですね。

コミュニケーションの活性化



編集部

V: 特に興味深かったのは、「なるほど」「同感」「納得」の使い分けです。新学習指導要領の方向性を考慮して、学校全体で取り組まれていることですか？

澤: いえ、私のオリジナルです。一方通行の言語活動ではなく、友達の感じたことや思ったことを受け止めて、相手に返していくという活動を大切にしたいと思っています。「なるほど」「納得」と言葉にすることによって自分の中に入っていきような気がしますし、これらの言葉を使うようになってから、子どもたちの声も自然と大きくなりました。

V: 「なるほど」と「同感」と「納得」の違いはなんですか？

澤: 「なるほど」は、友達の言ったことに「あ、そうか」と気づいたときに使います。自分とは違った意見でも、そういう考えがあるのかということなので、相手に賛成しなくてもいいんです。「同感」は自分の考えと一緒に、「納得」は合点がいった、ということです。

V: 子どもたちは完全に理解しているようでしたし、すっかりはまっていましたね。

澤: 使いやすいのだと思います。

V: 言葉といえば、子どもたちから出

された前時の感想を先生が紹介したところで、とてもレベルの高い言葉が使われていました。

澤：そうなんです、私もびっくりしました。トーンチャイムを1人に1つずつ持たせて鳴らしたとき、1つずつの音だと「きれい」という感想、「ドレ」「レミ」「ミファ」というように隣の音を2つ鳴らしたときには「微妙」という感想が出ました。では、1個飛ばしで2つ鳴らしてやってみようということで、「ドミ」「レファ」「ミソ」と鳴らしてみると「こっちのほうが音がまるやかでいい感じがする」と言いました。それなら1個飛ばしで音を3つにしたらどうなる？ということで鳴らしてみると、「厚み」とか「深み」という言葉が出てきたんです。覚えてほしい言葉や知ってほしい言葉は、「みんなが発見した言葉」として知らせるようにしています。

音符はひらがなを読むように…

V：音楽の基礎的な力がかなり育っていると感じられる光和小の子どもたちですが、それでもやはり何割かは楽譜に抵抗感があるようですね。

澤：そういう子どもは相当いますよ。4年生のときは、楽譜に音符の読み方を書かせていました。でも、音符をひらがなと同じように扱いたいと思ったので、子どもが自分で音符の動きをよく見て歌っていくうちに、この音符は前にもあったなと気づき、知らず知らずのうちにインプットされていくような活動を始めました。楽譜への抵抗感

をなくすためです。

V：書いてしまうと、階名を歌詞のように覚えているだけになり、実際の音符とのすり合わせができませんよね。

澤：「シとかソとか読みにくい」と言っていた子どもがいましたが、あの子は「たま」の動きを見ずに文字に頼っているのです。ですから、繰り返しがあるときは、私は書かずに、子どもの視線を「たしかあそこにあった」と楽譜に戻すように助言しています。「たま」の位置や動きをよく見ようね、と。それでもまだうまくいかない子どもには、とにかく劣等感をもたせないような工夫をしています。ドレミが嫌だと音楽を苦手と思う子もいますから。

V：教室の前に置かれた「親切楽譜」は効果的ですね。

澤：拡大した「親切楽譜」を提示することによって、教室の前に来やすい環境をつくりました。子どもたちがここなら安心して学べるという場の設定です。個人指導もしやすいですし。指で音符を追っている子どももいるので、そこをほめたりしながら地道に行っています。

V：実際の曲を通して、繰り返し学習を積み重ねていくことが大切なんですね。

澤：例えば4年生では、リズム譜に慣れてきたら、リズムカードを使ってアンサンブルを行います。その際打楽器の編成にリコーダーなども加えます。使う音も「シラソ」だけでなくどんどん音を増やしていくなど、学習を積み重ねながら音の場所を覚えて楽譜への



●さわ・まさえ
練馬区立光和小学校教諭

→P.38 年間指導計画の資料もご協力いただきました。

抵抗感をなくしていくことをテーマとしています。高学年では、鑑賞と表現をつなげていくのが重要なテーマです。

「手だて」を準備する

V：反復記号の説明で、小節に学級担任の氏名を当てはめていたのはとても興味深かったですね。子どもたちもすんなりと『威風堂々』に入っていくことができました。

澤：音楽の内容に触れながら楽しいと感じることが大切なのですが、「こういうふうをやったら、できるようになった」という「手だて」みたいなものを、できるだけ準備するのが私の役目と思って、いろいろと工夫を重ねています。

V：ほんの小さなことでも納得してで

きるようになったり、前に習ったことを新しい曲にも生かすことができたりすると、音楽の楽しさもレベルアップしますね。

澤：「これはあのときに習ったな」と気づかせることが大切なんです。個々の点がつながって1本の線になっていくような指導を目指しています。

V：この曲は演奏できたけれど、そこで学んだことが他の曲では生かされないという実践は少なくないと思います。

澤：私自身、以前の指導ではその傾向がありました。でも、工夫することで考え方が変わってきました。例えば今日のカードも、以前は「これはこういうものです」と示すために使っていましたが、今は学習の流れの中でできるだけ自然に示すように変えたので、使いやすくなりました。

V：レガートやスタッカートの概念を多くの子どもは理解していましたね。ただ、技能的に、音楽の流れの中で活用できるかどうかは別問題かもしれません。

澤：そうですね。歌唱活動でも例えば、『心から心へ』という曲の場合、最初はレガートで、中間部は元気づけるために歯切れよく歌いたいという子どもたちの発言を反映させて歌い、だいたい定着しました。でもそれをリコーダーや鍵盤ハーモニカで実践しようとする、まだまだ難しい場合も多いですね。

V：澤先生が最後にほめていた子どもがいましたね。

澤：今日の授業で最も感動したことです。1本の指でしか演奏できなかった

子どもが、レガートの意味を理解してなんとか音をつなげようとほかの指を動かし始めたんです。

V：何かが子どもの中で動き出したんですね。そういうチャレンジができる雰囲気や場をつくるのが大切ですね。

澤：自分にはできないとかできるとか、そういう価値判断にならないように、自由な場をつくっています。子どもは、よいものやカッコいいものについて自分の感覚でしっかりと受け止めているものです。自分が心地よければ絶対次につながる、ということに子ども自身が気づき、意識をもってほしいなと願っています。子どもの感性はすばらしいものです。

多様な鑑賞教材の選択

V：高学年では、鑑賞と表現をつなげていくことが重要なテーマとおっしゃいましたが、この題材では、名曲やかなり大規模な曲が取り上げられています。どの部分をどう聴かせるかということにもよりますが、それぞれの曲はどのように関連づけられているのですか？

澤：『こきょうの人々』で和音を学んだあとに『ニュルンベルクのマイスタージンガー』前奏曲を聴かせました。その際、まず「ドーソーソー ミファソラ シドレミファーミレド…」とホワイトボードに書いた階名をみんな

で歌い、「これが旋律だよ」と言ってオルガンで弾きました。そのあと「これをオーケストラで演奏するとどうなるか聴いてみようね」と言って聴かせたら「カッコいい」という感想が出てきました。また、『茶色のこびん』の学習では、はじめにバッハの『ポロネーズ』を鑑賞しました。チェンバロとチェロ、フルートだけの中間部と合奏の部分に分かれている形式を生かし、中間部を聴かせて、「低音の動きがよく聴こえるね。これを聴いてどう思う？」と質問して、低音に注目させました。そのことが『茶色のこびん』へとつながっていきます。『茶色のこびん』のメロディーや低音の部分を、「これはチェンバロの役」などと言いながら和音を弾いて、低音について学びました。「合奏になったとき感じはどうだった？」と子どもたちに聞くと、「いろんな音が混じり合っていて音楽が豪華だった」という感想が出てきたのですが、そこは低音についての学習にとどめました。そのあと、和音の学習をして、



そしてまた表現へとつなげていく流れです。

V:『ハンガリーラプソディ』も使っていますね。

澤:あの曲は低音が特徴的なので、そこに注目して聴かせました。

V:「低音」に焦点を絞ったねらいに即して、教材を選んだわけですね。

澤:私の趣味で選んでいるところもあるのですが、最後に『タンホイザー』序曲を加えて聴かせると「和音がつながっていくのはきれいだな」と感じてくれるかなと思います。

V:こうした結果、「低音の魅力」と「和音の魅力」が結び付いて12時間ということですね。

澤:そうです。

授業での約束事

V:子どもたちが2人組で聴いたり、お互いに評価し合ったりすることを通して、子どもたちはこういうところに気をつければいいのかと認識していましたが、ふだんからこのような活動をされているのですか？

澤:2人で組んだり、歌の場合は5、6人で組んだり、過半数やクラス全体のときもあります。どんな形で組む場合であっても、そのときの約束事を決めています。それは「ひとりぼっちはつぐらないこと」「自分から入れて言うこと」というもので、だれとでも組めるように工夫しました。また、「人を笑わないこと」「やっている自分も笑わないこと」というものもあります。そういう約束事を徹底したところ、だ



れとでもどんどん組めるようになりました。嫌いな人がいても上手に付き合う、人との付き合い方を学ぶという意義もあります。

V:約束事はとても大切だなと感じました。静かにさせることや次の指示に移ることだけで時間をかなりとられてしまう場合もあると思いますので。

澤:今回はすぐ静かになりましたが、そういうときには子どもも心地よさを感じているはずですよ。そんなときに「この間無駄な話が少なかったから、たくさんお勉強ができましたね」と言って、子どもとよいところをどんどん共有していくと、授業に取り組む態度も少しずつ変わっていきます。

V:限られた時数の中で、多くのことを学べるように、何かができるように

してあげたいという澤先生の姿勢が伝わってくる授業でした。澤先生は4年生からの担当ということですが、3年生までの担当の先生とはどういう打ち合わせを行っているのですか？

澤:体いっぱい音楽を楽しめるようにして4年生に進級させてくださいとお願いしています。リズムに合わせて動いたり、友だちと組んだりすることが自然とできれば、余分な時間がかかりません。低学年のうちからリズムによって体や気持ちが解放されるような表現活動をたくさん体験することがよいと思っています。

V:これからも、先生が蒔かれるたくさんの音楽の種が、子どもたちの中で育っていったほしいと願っております。ありがとうございました。

授業者に訊く ④

東京都のほぼ中央に位置する府中市に

今回は唯一の中学校を訪ねました。

2年生が校内合唱コンクールで歌う曲を、鑑賞を通して選んでいく内容です。

授業後には、横田先生に歌唱指導について幅広く語っていただきました。

授業者：横田純子

東京都府中市立府中第四中学校

創意工夫を引き出す教師の言葉

聞き手 ヴァン編集部 + 先生A [小学校] + 先生B [高等学校]

『浜辺の歌』の表現を 自分たちで工夫する

Vent: 先日『浜辺の歌』を教材にして研究授業を行ったとお聞きしました。その授業はどのようなねらいから構想されたのですか？

横田: この秋に行われる全日音研の大会を視野に入れて行った授業でした。『浜辺の歌』を教師から範唱などで教わるのではなく、生徒が自分で試行錯誤を重ねながら表現を工夫していく、先生にうまくしてもらうのではなくて、自分たちの力でうまくなりましょう、というねらいです。

V: でも、範唱やCDなどを聴かせることはないのですか？

横田: もちろん何かを聴かないとどんな曲かわかりません。ただし、何を範唱として聴かせたらよいのかがとても難しい、固定観念を押し付けることになってしまいますので。だから1つだけではなく、混声、女声、男声の合唱をはじめ、女声、男声のソロ、YouTubeからダウンロードしたソロ、そ

れからメロディーを箏で演奏しているもの、口笛で吹いているものなど、いろいろ集めて聴かせました。それでもすべて聴くのに7分もかからなかったと思います。結局、生徒たちは混声合唱がいちばん気に入ったようです。富澤裕さん編曲による『浜辺の歌』の混声合唱は、ソロと比べて表現がふわっと広がり、4部でハモるところは生徒たちも「はあー」とため息をついて聴き入っていましたね。

とにかくこの授業では、範唱やCDを聴かせてこういう歌だと説明してから、では歌いましょう、という流れを打破したかったんです。ある程度までどんな曲なのかわからない状態で、自分たちのイメージや発想から表現を工夫していく方向性を打ち出したかったからです。そして2、3人のグループで活動する。5人のところもありましたが、人数にはそれほどこだわりません。アイディアが出るのがグループ活動の目的です。

V: 具体的にどのように活動を進められたのですか？また、生徒からは、ど



のようなポイントや工夫が出てきたのでしょうか？

横田: みんなの意見や感想、課題などを全部ボードに書き出して、一斉に挙げてみました。内容が共通するもの、いくつかのカテゴリーに分けられるものなどがわかった段階で第1時が終わり、第2時ではグループ内でコミュニケーションをとりながら表現の工夫をしていきました。具体例を挙げると「遅いから息が続かないんだよ」といった速さの設定に関することや、リズムや音程が取れない箇所では「ド～ソド～ソ#のgisの音を高めにとろうとしてもとれないのはどうして？」などの問題点について自分たちで考えていました。「ここがこんなふうになっているのは何か変じゃない？」など、声の質に関すること話合っていたようです。

V: それが黒板に示してある「速さ」「リズム」「音程」「声の質＝歌詞のし



やべり方」といったカテゴリーなのではないでしょうか？

横田：そうです。でも偶然そうなったんです。参観の先生方もびっくりしていました。そのほかに、「盛り上げる場所で盛り上がっていない」というのもあったし、「ピアノ伴奏とかみ合わない」「伴奏の流れと歌の流れがずれている」とか、「ピアノだけが目立っている」など、いろいろな発言がありました。たった4段しかない楽譜の中で、生徒たちは、ここができたとかできていない、次回はクラス全体としてどういうことを練習していこうとか、課題を出し合うんです。「うちのクラスはここが苦手です」「もっとこんなふうにならなきゃいけないんです」といったように。

地ならし、種まきが必要

V：生徒が自ら表現を工夫する授業では、常日頃教師が何を教え、どのよう

に伝えているかが逆に如実に現れるように思われます。

横田：そういう意味では、教師自身の「言葉」がとても重要になりますね。それから、日頃の種まきというか、地ならしが必要です。そうでないと、生徒からの確かな工夫のポイントは出てきませんし、いろいろな意見を出し合い受け止め合うというコミュニケーションの基本が育っていないと、ある特定の生徒の意見だけが通ってしまうことがありますから。

V：先生はこの中学校に赴任されてまだ数か月だそうですね。

横田：やっと3か月過ぎました（笑）。これから授業や校内合唱コンクールの練習を重ねていくうちに、「ああしよう、こうしよう」という提案が生徒たちからまだまだ出てくると思っています。

V：見方を変えれば、教師自身がしっかりと教えているかどうかをとらえ直すために、こうした指導はとても大切

と言えますね。

横田：生徒たちが自分でまずどう工夫するかを考えていく活動、教師から教わる活動など、題材や教材によっていろいろあっていいと思うのですが、そのバランスが難しいですね。どこまで生徒たちが自ら消化して、教師がどこで答えを教えるか、という点についてです。

徹底的な教材研究と教師の言語力

V：音楽を形づくっている要素やそれらの働きを表す用語や記号が教室に貼ってあり、生徒たちが感想や意見を述べる際に生かしている実践も見受けられますが…。

横田：そうした用語や記号などをしっかりと意識づけたり、生徒たちが感受したものを確認したりするためには有効でしょうが、あまりに言葉にこだわりすぎるのは問題だし、実際に音楽の中で活用できなければ意味がないように感じます。

V：音楽科教育の充実に向けて、言語活動を重視し、どのように工夫していくかが重要な課題の一つですが、かと言って、話し合いの場を設ければよいということではありませんね。

横田：まったくそのとおりです。例えば、道徳や社会、国語などでも、「はい、話し合いをしましょう」、「はいグループ活動をしてください」となってしまうがち。唇を動かすことが言語活動ではなく、何かを感じて頭の中でいろいろな言葉として整理するのが言語活動



●よこた・じゅんこ
東京都府中市立府中第四中学校教諭

だから、そこを育てなければと感じます。

V: 本日参観させていただいた授業は、校内合唱コンクールの課題曲を、鑑賞を通して生徒たちが選んでいくという実践でした。〔共通事項〕や言語活動とも深くかわる内容でたいへん興味深かったです。

横田: ずっとこのスタイルで続けてきています。〔共通事項〕の内容も言語活動も、音楽を学習するうえで不可欠で大事なことは違いありませんが、それらが「最初にありき」のような授業、また大げさにとらえてしまう傾向には危惧を感じます。私たち教師は別にそれらを忘れていたわけでもないし、取り上げてこなかったわけでもないのですから…。生徒が表現を工夫したり、学びを実感したり、他の活動に生かしたりするための手掛かりとして位置づ

ける必要はありますが、音楽そのものの活動がないがしろにされるようだと、それこそ本末転倒だと思います。

V: 言葉とか専門的な用語などは、書いたり繰り返し使ったりしないと忘れてしまいますよね。

横田: 教師が使う言葉は生徒に直接伝わりますし、音楽室で飛び交う言葉も重要ですね。生徒がどのように意見や感想を述べるかに注目し、生徒から出てきた言葉をていねいに受け止めていく必要性を痛感します。私も生徒たちから出てきた言葉を書き留めてあるんですよ。

V: 先生は、鑑賞する直前や、曲によっては間奏のところで、実には的確で短いコメントや問いかけを挟んでいらっしゃいましたが、生徒のイメージを膨らませたり、聴くポイントを押さえたりするのにとても効果的でした。曲の特徴や作者の意図、あるいは教師自身のイメージも含めて、あのようなコメントを付け加えることこそ音楽科で大事にしたい言語活動の一つだと思います。音楽のよさを言葉にしてわかりやすく子どもに返すためには、教師自身の言語力を磨く必要がありますし、あらためて教材研究の重要性を痛感しました。

横田: 聴く活動でも言語力を育てることができると思って取り組んでいるのですが、間に入れる言葉は慎重に選んでいます、タイミングも含めて。緊張しますよ。

V: 本当ですか！先生は教材をしっかり自分のものになさっているように

感じました。すぐにできることではないと思います。次のフレーズを準備させる、表現のイメージをもたせるという意味で、まさに指揮者のようでした。

先生A: 先日参観したある授業では、教師が音楽の諸要素のことばかり話しているので、生徒からもそうした言葉しか出てこないんです。教材研究や分析が不十分だと、そうした方向に向かってしまうのかなと思いました。今日の授業で、ある男子生徒のメモを見せてもらったら、『Oh My Soldier』について「戦争の様子が痛々しい」「自然や人の感情が感じられる」など、横田先生の示されたポイントを彼は聴き取っていました。

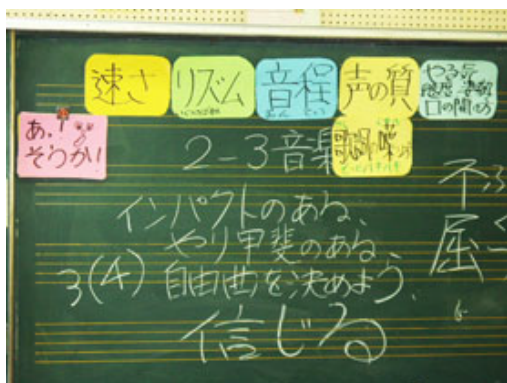
横田: 校内合唱コンクールで自分たちがどの曲を歌うかという前提で聴いているので、聴き方が単なる鑑賞とは違うんです。

先生A: それもありますが、やはり先生のコメントが彼らの鑑賞力を高めたと思います。教材分析というどうしても構えてしまったり、自分には和声的な知識がないからできない、と言い訳したりしがちなんですが、歌詞から入ると具体的でわかりやすいですね。

横田: ええ、歌唱や合唱の教材は分析しやすいと思います。

詩を大切に

V: 今日提示された曲は、どちらかというと短調で始まる曲が多かったようですが…。



横田：別に暗い曲、難しい曲がよいというわけではなく、もっといろいろな名曲があるよ、ということを知ってほしいんです。

V：子どもたちの反応、評価はどうなのでしょうか？

横田：彼らがどう評価しているのかわいたら、『消えた八月』や『蒼鷺』などに満点の3点が付いていて、歌いたいと書いてありましたね。「暗い曲だけどやりたい」と。

V：やはり歌詞は大事なんですね。作曲家も、詩の選び方で差がついてしまいますね。

横田：差がつくと思いますよ。歌うモチベーションというのは、やはり言葉が大きく影響してきます。

V：そうすると、合唱教材を選択する際も、やはり詩は重要視されますか？

横田：私は詩で選曲してしまう傾向があるかもしれませんね。メロディーラインやハーモニーはもちろん、詩がよくて揺さ振りがある曲を生徒たちは歌いたいと感じるようです。

V：教材開発においても、歌詞には留

意したいところですね。

横田：詩の開発をしたほうがいいですよ。みんなが飛びつく曲は、言葉がおしゃれで詩の内容もいい。ポップス系の曲が支持される理由はそこにあるのかもしれない。森山直太朗の曲とか、今年度のNHK全国学校音楽コンクールの中学校の課題曲の『YELL』とか。彼らの詩は生徒たちの心を確実につかみますね。

V：詩のよさもいろいろな側面があるから難しいですね。メッセージ性の強さ、言葉一つ一つの美しさ…。脈絡がなくてもエネルギーのある詩もありますし。

先生A：歌詞で思い出しましたが、私の小学校では毎年卒業式に向けて、少し大規模な合唱曲に取り組むんです。そのために担任と音楽専科で候補曲を相談します。去年は担任が国語科だったのですが、私が思っていた曲と違うものを選んだんですね。「どうしてこれがよかったんですか？」と聞くと、「歌詞がすごく響きます」ということでした。

横田：何を選んだのですか？

先生A：若松敏さんの『最後のチャイム』です。子どもたちは2回聴いただけで泣いていました。歌詞のもつ力は大きいですね。

合唱指導の秘訣は？

V：授業の進め方や指導法について、以前と変化したところはありますか？

横田：しいて変化と言うならば、生徒を待つようになったことです。待てるのは、もしかしたら自分が種をまける

ようになったからかもしれません。年も取りました（笑）。間合いがきつと長くなったでしょうね。全体にはそんなに変わっていないと思います（笑）。

先生B：『浜辺の歌』の研究授業のお話の中で、合唱練習をこれから重ねていくうちに、自分たちでうまくなる方法が少しずつわかってくるんじゃないかとおっしゃっていましたが、その指導法は具体的にどういうものですか？

横田：よく聞かれるのですが、私の場合は伝えたい言葉をセリフにします。どうする、何をする、今度はあれがやりたい——というように。生徒たちの理想的な会話をイメージして書き出してみるんです。「今日は何をする？」「まずCDに合わせて歌ってみよう」「この音が外れている」「ここは長すぎるからここで切ろう」「この音だけでいいよ」「この音が取れない」「どうする？」「じゃあピアノで弾いてみよう」など…。それらをパート練習の時間で自由に工夫しましょう、と種まきをしているんです。

V：まさに言語活動の工夫であり、学び方を学ぶということですね。

横田：私の原点となっているのは、学生時代のレッスンです。私はピアノ科でしたので自分のレッスンも含め、伴奏者としてたくさんのレッスンを受けました。名指導者といわれる方々の言葉は本当に素敵だったのです。生徒たちがより多くのすばらしい音楽経験を積むことができるよう、教師が言語力を磨く必要があると痛感しています。

授業者に訊く

クラブ活動編

授業実践紹介の番外として、「授業者に訊く」では初のクラブ活動編をお届けします。

オーケストラの活動で歴史のある福岡市立福岡西陵高等学校管弦楽部を作曲家の八木澤教司氏が訪ねました。

音楽のクラブ活動といえば吹奏楽や合唱が主流となっている中、オーケストラの演奏者として生徒たちはどのような取り組みをしているのでしょうか？

吹奏楽のフィールドで活躍中の“やぎりん”こと八木澤氏が鋭く迫ります。

指導者：松田和宏

福岡市立福岡西陵高等学校

管弦楽部の紹介

福岡市立福岡西陵高等学校の管弦楽部は、福岡市内の高校で唯一のオーケストラです。部員数が128名（2009年7月現在）、顧問は音楽科教諭の松田和宏先生と国語科教諭の黒木麻矢先生。オーケストラの指揮は松田先生が担当しています。今年で創部から32年目となる歴史ある部活動であり、「音楽の喜びと感動」を伝え、福岡市民の財産となるようなオーケストラを目指して活動しています。

以前は、部のOB等にサポートされていた年に一度の定期演奏会も、現在は現役部員だけで行うようになりました。また、定期演奏会以外にも、国内外で活躍するプロの演奏家との交流、チャリティーコンサートや地域のイベントへの出演、他校との合同演奏会の実施など、演奏の場をさらに広げ、積極的に活動を行っています。これらは、生徒が目標を明確にして取り組むことができるとともに、その成果を実感するよい機会にもなっています。学校だけではなく、保護者や地域、卒業生、一般の方々に支えられ、生徒たちは成長を続けています。



音楽と向き合う姿勢を学ぶ

聞き手 八木澤教司^[作曲家]

生徒の主体性を育てる

八木澤：生徒の皆さんは、明るく和気あいあいとしていますね。

松田：ありがとうございます。とても素直な生徒たちです。

八木澤：僕は今、吹奏楽を中心に仕事をしていて、オーケストラの合奏練習を見学したのは今日が初めてなんです。「ハーモニーディレクター」はオーケストラでも使うのですね。

松田：私は吹奏楽を12年間指導していたので使っていますが、他の一般のオケを振る時には使いません。本校の管弦楽部では高校から楽器を始めるケースが多く、音感のある生徒ばかりではないため、基準になる音を与えてあげるほうが早いんです。

八木澤：練習の方向性としては吹奏楽もオーケストラも似ているな、という印象を受けました。吹奏楽畑の先生からは、校務に追われて部活にはあまり顔を出せないという話をよく聞きますが、先生はいかがですか？

松田：私の場合、わりに余裕はあるの

ですが、ここ2、3年は生徒たちに任せて主体性を育てるようにしています。現在部員が約130人いるので、顧問2人で全員を見るのは不可能ということもありますし、生徒の中からリーダーを育てるほうが、運営的に効率がいいということもあります。

八木澤：リーダーの生徒が行った活動の内容を、先生は後で確認されるのですか？

松田：はい。部活の終了時に毎回数名がその日の課題を発表して反省します。例えば、ある曲の第1楽章について弦パートから、「ここからここまでのメロディーラインをはっきりさせましょう」「リズムを練習しました」などの発表があります。そうすると管楽器パートから、「弦はここまで努力しているから、自分たちも頑張ろう」という発言があるなど、お互いに情報交換したり刺激し合ったりしながら進めています。

八木澤：作品の書かれた経緯や時代背景などについても生徒たちは勉強していくのですか？

松田：ええ。係の生徒が文献を調べてきて提示します。

八木澤：いろいろな資料を用いて、総合的に音楽に生かしていくのですね。

松田：資料は楽譜の付属としてとらえています。

八木澤：今日の練習でも「よく聴く演奏ではこのままrit.していくけど、今日は楽譜どおりここでa tempoにしましょう」という指示をされていましたね。

松田：はい、少しずつですが私の音楽観が出ることはあります。でも基本的にはできるだけ楽譜に忠実に演奏したいと思っています。

八木澤：スコアリーディングのようなこともしますか？

松田：スコアリーディングはしませんが、コンマスやパートリーダーはみんなスコアを持っています。私が注意している時には生徒もスコアを見ている、という状況に数年前からなってきました。

八木澤：初心者の生徒には演奏できないようなパートの場合、簡単なものにアレンジすることがありますか？

松田：基本的にアレンジはしませんが、入部したばかりの1年生が夏の定期演奏会で演奏する1曲だけは簡単に書き換えます。赴任した当時は私が書き換



えていましたが、今はパートリーダーが全部つくってくれます。生徒たちのほうが経験者なのでよくわかっているのです。

本物の音楽に触れる

八木澤：吹奏楽とオーケストラとは、指導する上で何か根本的な違いがありますか？

松田：吹奏楽の場合、合唱も同じですが、「音楽はコンクールが目的じゃない、勝ち負けじゃない」と皆さんおっしゃいます。私もそう言っていました。し

かしコンクールに出れば、どうしても勝ち負けを意識してしまいます。だから、音楽をつくる時にもコンクールのために、細かなリズムとか音程といった、すごく小さなこと、細かいことまで意識していくわけです。

でも、演奏時間8分ぐらいの曲を、場合によっては半年間ずっと練習し続けていて、本当におもしろいのかなと…。いちばん厳しいのは、コンクールで結果が出なかった時です。先輩たちは全国大会に行った、でも自分たちは地方大会で終わってしまった、という



●まつだ・かずひろ
福岡市立福岡西陵高等学校教諭

宮崎大学教育学部音楽科卒業。福岡市立姪浜中学校を皮切りに福岡市立高取中学校、福岡教育大学附属福岡中学校を経て、平成11年、福岡市立福岡西陵高等学校に赴任。

ことがあると、生徒たちの3年間は、
ともするとスポーツをしたような感覚
で終わってしまうのではないかと。

オケの場合はコンクールのような目
に見える目標がありませんので、纯粹
に作品のもつよさに意識を向けること
ができます。例えば、今日練習したベ
ートヴェンでは、彼の作品のよさや、
古典のよさに触れることができるので
す。

八木澤：松田先生は平成11年から福

岡西陵高校にお勤めですね。先生は、
自分たちのオーケストラを上達させよ
うとしているだけでなく、福岡から多
くのことを発信しようとされています。
それがいろいろな人たちの共感を呼ん
で、あちこちで合同演奏が行われてい
ることにつながっていると思うのです
が、特に何か意識されていますか？

松田：我々は高校生のアマチュアオケ
ですので、同世代の仲間たちを常に意
識しています。吹奏楽や合唱も同じ音
楽なのに、それぞれ一つの世界ができ
ていますよね。音楽は楽器や形態が違
っても、していることは同じです。そ
れを知らせたいために、いろいろな方々
と交流しています。

八木澤：ソリストにプロの演奏家を招
いてのコンチェルトは毎年行ってい
らっしゃるのですか？

松田：今年は「第九」を演奏するので、
歌のソリスト4名の方々と交流するこ
とになっています。

八木澤：プロの演奏家を招くのは、本
物に触れさせようという考えからで
すか？

松田：そうですね。私は長く吹奏楽を
指導していましたが、吹奏楽の場合、
指導者としてプロの方を招くことはあ
っても、演奏家として招くことはあま
りないと思います。高校生の間では、
コンクールの全国大会で金賞などを獲
っている団体が、一つの頂点にいるイ
メージがあります。でもそれはやはり
アマチュアの世界のことであり、実際
はその上にプロがいます。

プロの方は音に対してすごくシビア
で、自分自身に厳しく活動されていま
す。高校生どうしでちょっとうまいか
らすごい、といったレベルとは違いま
す。だからプロの方に来ていただいて、
音楽や音に対する考え方、そしてもっ
ている技術や音を、生徒たちに生で聴
かせたいな、と思っているのです。

部員が授業のサポーター

八木澤：先生はオーケストラを指導す
るようになってから、指揮法をかなり
勉強されましたか？

松田：ええ、勉強しました。アマチュ
アの高校生でもオーケストラの場合、
最初にパッと通して演奏します。吹奏
楽を指導していた時は、そういう経験
がありませんでした。ひどい話で
すが、初めて楽譜を見て、指揮棒をメ
トロノーム代わりにしてたたきながら、
「はい、やってごらん」と言って、で
きなければ生徒ばかりを怒っていました。
ところが最大の原因は指揮者にあ
ったんです。



まずは最初から最後まで通す。たとえ生徒が止まっても通していく、ということから始めました。そのためには勉強しないといけなかったんです。

八木澤：なるほど。先生がきちんと譜読みをした上で、指揮者として恥ずかしくない状態で生徒の前に出る、と。

松田：一応きちんとスコアリーディングした上で臨むようにしています。

八木澤：授業と課外活動がリンクしている部分はありますか？

松田：管弦楽部があるので、授業でヴァイオリンを扱っています。

八木澤：ヴァイオリンの楽器構造についてとか？

松田：いいえ、実際に演奏します。選択授業で音楽を選択した生徒全員が1ヶ月半～2ヶ月ぐらい学習します。1クラスに4人ぐらい弦パートの部員がいて、調弦などもしてくれます。

八木澤：部の生徒たちが、先生のサポーターですね。

松田：はい、調弦や楽器のメンテナンスがたいへんなので、それを見越してお願いしています（笑）。

八木澤：先生は楽器も演奏されるのですか？

松田：ピアノを演奏しますが、ヴァイオリンはほんの少しかじる程度で、演奏まではできません。生徒のほうがいいかにうまいです。楽器の構造を知るという意味で、売られているキットを買ってきて実際に楽器を作り、それを使って授業をしています。壊してもいいように、安いもので（笑）。

『ボレロ』は5年前に注文!?

八木澤：今、吹奏楽では楽譜のコピーが問題になっていますが、楽譜に関して何か問題点はありますか。

松田：うちは買うことが多いですね。

八木澤：貸し借りみたいなことは？

松田：インターネットで登録しているエージェントがあるので、そちらのものはお借りしますが、ほかはすべて買っています。

八木澤：入手するまでに時間もかかりますよね。

松田：ええ。『ボレロ』は5年前に注文しましたが、まだ届いていません（笑）。去年は『ローマの祭り』を借りましたが、時間がかかりました。

八木澤：『ローマの祭り』はかなり難しい曲だと思いますが。

松田：ええ、難しかったです。でも吹奏楽のコンクールで使うので、耳慣れていて、生徒が演奏したいと言った曲だったので（笑）。

八木澤：今後、生徒さんたちと演奏に挑戦してみたい曲はありますか？

松田：ブラームスの交響曲をやりたいですね。ブラームスは弦がある程度鳴らないと難しいのですが、第1番は一度扱ったことがあるので、第2番、第3番も挑戦してみたいなあ、というのはあります。

一生音楽にかかわってほしい

八木澤：管弦楽部の生徒たちが、ほかの生徒さんの模範になることはありま



●やぎさわ・さとし
作曲家

1975年岩手県生まれ。武蔵野音楽大学作曲学科卒業。同大学院音楽研究科修士課程修了後、2年間研究員として研鑽を積む。作曲を浦田健次郎、田中均、萩原英彦の各氏に、トランペットを関根剛二氏に、吹奏楽指導法を佐藤正人氏に師事。吹奏楽作品が国内の重要なレパートリーになるとともに、海外においても演奏、出版されるなど国際的な人気を集めている。2010年「ゆめ半島千葉国体」式典音楽総合監督。現在、東京ミュージック&メディアアーツ尚美管弦打楽器学科講師。

☆HP <http://www.sounds-eightree.com/>

すか。

松田：はい。特に最初はそうでした。部員が約130名と言いましたが、全校960名のうちの130名です。40人学級に部員が7、8人ぐらいずついるので、その生徒たちがまじめに向き合うことによって、学級の雰囲気が変わっていきます。

八木澤：素晴らしいですね。部活の生徒たちには勉強もきちんとするように指導したりしますか？



松田：はい。管弦楽部には学年でもトップクラスの生徒がたくさんいます。うちは音楽高校ではありませんので、部活だけをしていてもだめです。最終的に行きたい大学や進路に向かって、生徒がその目標を実現できるかに責任を感じます。ですから、まずは勉強ありきです。

八木澤：先生にコンタクトを取りたくても取れない方がおそらく全国にいらっしゃると思うのですが、そういう方に何かメッセージがありましたらお願いします。

松田：おこがましいのですが（笑）、やっぱり情熱でしょうか。これは音楽に限らずどの世界でも同じでしょうが、情熱がないと何も始まらないと思います。まず情熱をもっていただきたい。その情熱は人を動かします。まず生徒を、それから保護者や、地域を。

私はヴァイオリンも弾けませんし、何もできませんけれど、指導者として福岡市民に知っていただけるオケになりたい、なろう、その思いだけでやってきました。最初はどんなに頭を下げてでも誰も相手にしてくれませんでした。でも、練習しているのに発表する場がないなんてさみしいですよね。そういう場があればあるほどモチベーションが高まります。コンクールの場合は会場に審査員さえいれば、たとえ観客がゼロでもたぶん誰も文句は言わないと思います。でもオケの演奏会で誰もいなければ、絶対におもしろくない。だから、いつかは「演奏しに来てください」と言われるようなオケになろうと。

最初は、私ともう一人の顧問だけが必死になって突っ走っていたんです。辞めていく生徒がたくさんいたし、保護者からのクレームもたくさんありま

した。でも、その情熱だけは忘れずにずっと続けていたら、いつの間にか生徒がすすんで動き始めたんです。今では生徒が情熱的になってきました。

八木澤：やはり先生の情熱が生徒たちに伝わっているということですね。卒業してからは音楽を続ける人も続けない人もいると思うのですが、この部活動で3年間を過ごした生徒たちには、将来どのようなようになってほしいですか？

松田：一生音楽にかかわってほしいな、と思います。演奏家ではなくても、聴衆として。我が町に〇〇のオーケストラが来ると聞いたらすぐにチケットを買いに行くような、クラシックファンになってほしいですね。

八木澤：そうすれば地域ももっと盛り上がりていきますね。今後のご活躍を楽しみにしています！

特集

移行期の音楽授業

私の指導案・指導計画

ここでご紹介する5名の先生方の実践は、内容的には決して真新しいものではありません。これまで継続的に積み重ねてきた実践を、新学習指導要領の趣旨・内容に即して再構成し、作成された学習指導案と年間指導計画です。一部には今回新設された〔共通事項〕に対して、過敏になっているムードもあるようですが、〔共通事項〕を手掛かりにこれまでの実践を客観的にチェックし、子どもたちの音楽学習、音楽活動への架け橋としてしっかりと新学習指導要領に示されている学習内容を指導計画に組み込んでいくことが大切ではないでしょうか。

- 「曲の気分を感じ取って歌おう」 小学校・第1学年
- 「三宅太鼓を打とう」 小学校・第4学年～第6学年
- 「わらべうたをつくろう」 中学校・第2学年
- 年間指導計画 小学校・第1学年
- 年間指導計画 小学校・第5学年



私の指導案

館 雅之 横浜市立美しが丘東小学校主幹教諭

●館先生からのコメント

〔共通事項〕である「拍の流れ」を感じ取ることは、表現活動の基礎になってきますが、すぐに身につくものではありません。そのため、低学年から大切に指導をしたいと考えています。「感じる」活動として「体を動かす活動」を今まで以上に計画的、意図的に指導していくこと、参考教材の開発が求められると思われます。



1. 題材名 曲の気分を感じ取って歌おう (小学校・第1学年)

2. 題材について

この題材では、拍の流れやフレーズ、リズムの動き、歌詞の情景や気持ちなどから曲全体の気分を感じ取り、自分の思いをもって歌うことをねらっている。

そのため、拍打ちやリズム打ちなどで体を動かしながら、曲の気分を感じ取る活動を十分行うことが大切である。

3. 指導内容

A表現 (1) イ 歌詞の表す情景や気持ちを想像したり、楽曲の気分を感じ取ったりし、思いをもって歌うこと。

ウ 自分の歌声及び発音に気を付けて歌うこと。

B鑑賞 (1) ア 楽曲の気分を感じ取って聴くこと。

〔共通事項〕(1) ア(ア) リズム、拍の流れやフレーズ
(イ) 問いと答え

4. 教材

『うみ』 文部省唱歌／林 柳波 作詞／井上武士 作曲
「あの夏、一番静かな海」より『Clifside Waltz II』
久石 譲 作曲

5. 題材の目標

曲の気分や歌詞の表す情景を感じ取り、思いをもって歌う。

6. 題材の評価規準

ア 音楽への関心・意欲・態度	曲の気分を感じ取って、のびのびと歌おうとする。
イ 音楽的な感受や表現の工夫	拍の流れやフレーズ、歌詞の情景や気持ちを感じ取って表現の工夫をしている。
ウ 表現の技能	音程やリズム、きれいな歌声に気づいて歌っている。
エ 鑑賞の能力	音楽表現のよさや楽しさを感じ取りながら、範唱や友達の表現、様々な楽曲を聴く。

7. 指導計画と評価計画（2時間扱い）

時	○学習内容・学習活動	◆具体的評価規準【評価方法】
第1時	拍の流れやフレーズ、リズムの動きや音程をとらえて、歌詞唱をする。	
	○『うみ』の範唱を聴く。 ・すきなところを発表する。 ○『うみ』を聴きながら、拍打ちや拍子打ちをする。 ・曲の気分を感じ取って、拍打ちをする。 ・先生や友達のまねをしながら、拍打ちをする。 ・伴奏を聴きながら、拍子打ちをする。 ○旋律を聴きながら、拍の流れに合わせて歌う。 ・自分の歌声に気をつけて、「ラ」や「リ」で歌う。 ・フレーズごとに交互唱をする。 ・歌詞唱をする。	◆拍の流れを感じ取り、3拍子を感じ取っている。 （イ）【表情・活動観察】 ◆のびのびと進んで歌おうとしている。 （ア）【活動観察】

8. 本時の展開（2/2）

【本時の目標】曲の気分を感じ取り、気持ちを込めて歌う。

○学習内容 ・学習活動	指導の手だて ◆具体的評価規準【評価方法】
○『うみ』を歌う。 ・音程、発音、リズムに気をつけて歌う。 ・拍の流れを感じ取って歌う。 すてきな「わたしのうみ」を思い浮かべながら気持ちをこめて歌おう。 ○「わたしのうみ」を想像し、イメージを膨らませる。 ・海に行った経験や、自分の海に対するイメージを発表する。 ・波の様子を想像し、波になりきって『うみ』の旋律の流れに合わせて、腕や手を動かして表現する。 ○歌詞の表す情景を思い浮かべながら歌詞唱をする。 ・歌詞が表す様子や景色をとらえ、情景を思い浮かべて歌う。 ・思い浮かべた情景や思いを伝え、一人で歌う。 ○『Clifside Waltz II』を聴き、海のイメージを広げる。 ○思いをもち、気持ちをこめて『うみ』を歌う。	・拍の流れを感じ取って歌っている子どもを「すてきな歌い方だね」と賞賛し、まねをして歌うことにより豊かな音楽活動をしていこうとする気持ちがもてるようにする。 ・波の音のCDを流したり、波の音の音具（小豆を箱に入れて作ったものなど）で波の音を聴く活動を、子どもの発言に応じて行い、より想像が広がるようにする。 ・思い浮かべた情景を伝え、一人で歌いたい子を発表するようにし、それぞれの思いがあることが感じ取れるようにする。 ◆歌詞の表す情景を想像し、海のイメージを膨らませている。 （イ）【発言や活動の観察】 ・楽曲の気分を感じ取って聴いている姿を教師が紹介し、進んで聴くことの大切さに気づくようにする。 ◆曲の気分を感じ取って想像を膨らませて聴く。 （エ）【表情の観察】 ・教師が指揮のような体の動きを伴う表現をし、拍の流れを共有し、感じ取ることができるようになる。 ◆『うみ』にふさわしい歌声に気をつけて歌う。 （ウ）【演奏の聴取】

私の指導案

山内雅子 小金井市立小金井第一小学校教諭

1. 題材名 三宅太鼓を打とう (小学校・第4学年～第6学年)

2. 題材について

和太鼓は、体と心を開いて一心に打ち込んでいくとき、打ち手のリズムがぴったりと重なったとき、そしてそれを取り囲む学級全員での唱歌しょうがが一つになったとき、音の和が心の和となり、音楽的な基礎力とともに望ましい人間関係までも培うことができる大きな力をもった楽器である。それは伝統芸能がもつ力ともいえる。本題材では、ただ一つのリズムを繰り返すことで表現する「三宅太鼓」を打つことで、和太鼓の基礎的な技能とアンサンブルの力を身につけるとともに、友達と心を通わせながら自己表現する喜びを味わえるようにすることをねらっている。

3. 指導内容

- ①和太鼓の打ち方の基本を身につけるとともに、唱歌で太鼓を表現することができるようにする。
A表現 (2) ウ (共通事項) ア (ア) 音色
- ②拍にのってリズムを打ったり、下打ちのリズムと重ねて打ったりすることができるようにする。
A表現 (2) エ (共通事項) ア (ア) リズム、拍の流れやフレーズ
- ③互いの呼吸を合わせて徐々にテンポを上げ、フィナーレをつくりあげる。
A表現 (2) イ、エ (共通事項) ア (イ) 反復、変化、終止

4. 教材

「三宅太鼓」：三宅島のお祭りの神輿を先導する太鼓で「三宅島神着神輿太鼓」といわれる太鼓が基となっている。今回は、「ドンコドンコ」という下打ちにのって、下のリズムの部分のみをひたすら繰り返し打っていく。

ツクドンツクドンツクドン

ツクドンツクドンツクドン

ドドンガドンドン スッテッコドンドン

始めはゆっくり、徐々にテンポを上げ、最後は速い速度で全員のリズムが一つになり最高潮に達して終わる（序破急）。

5. 題材の目標

- (1) ばちの握り方や構え方など、和太鼓の基礎的な打ち方を知り、唱歌で覚えたリズムを打てるようにする。
- (2) 拍にのってリズムを打つ楽しさや心地よさを味わう。
- (3) 「三宅太鼓」を打つ活動を通して、友達とかかわる楽しさや友達とつながる喜び、伝え合う喜びを味わえるようにする。

6. 題材の評価規準

	題材の評価規準	学習における 具体的評価規準
ア 関心・ 意欲・態度	和太鼓の演奏に、友達と協力して意欲的に取り組んでいる。	①真剣に和太鼓と向かい合っている。 ②友達と合わせることを楽しんで、声を出し合い協力して取り組んでいる。
イ 感受や 表現の工夫	和太鼓の音を追求しながら、表現を工夫している。	①和太鼓の音へのこだわりをもって打ちこんでいる。 ②序破急の構成を感じ取りながら意図をもって表現している。
ウ 表現の技能	基本的な技能を身につけ、拍にのってリズムを打っている。	①正しいばちの持ち方と構えで、唱歌を唱えながら打っている。 ②拍にのって、アンサンブルをつくりあげている。
エ 鑑賞の能力	和太鼓の音色を体全体で味わいながら聴いている。	①音色の特徴や打つ人によって変わる音の響きを感じ取っている。 ②二つのリズムの重なりや序破急の楽曲構成を感じ取っている。

7. 題材の指導計画と評価計画

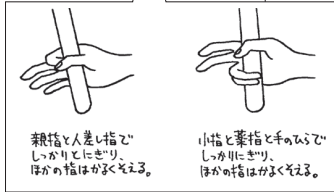
		○指導事項	◆指導上の留意点と ☆具体的評価規準
第一次	第1時	○和太鼓について基本的なことを伝える。 ○腰を割って構え、打てるようにする。 ○唱歌を唱え、前半を打てるようにする。	◆足を置く位置にテープを貼っておく。 ◆大きな声で唱歌を言えた時はほめる。 ☆アー① ウー①
第二次	第2・3時	○据え置きで三宅太鼓全曲を打てるようにする。 ○教師が打つ下打ちに合わせて、三宅太鼓のリズムを打てるようにする。 ○自分たちで、表裏のリズムを拍にのって打てるようにする。 ○太鼓を横向きに置いて挑戦させる。	◆円形になり、友達が打っているとき、唱歌で応援することを定着させる。 ◆しっかり打っている子どもには、少しずつ下打ちを入れていくようにする。 ☆アー② イー① ☆ウー② エー①
第三次	第4時	○まわり打ちをしながら、序破急の型によって自分たちで呼吸を合わせて、三宅太鼓全曲を打てるようにする。	◆太鼓を横向きに置き、一人4回打ったらかわる約束で、どんどんつなげていく。 ☆イー② エー②

●山内先生からのコメント

なんの授業でも同じですが、難しいことを出来るようになるのが目的ではありません。どんな子どもにも出来るシンプルな活動の中に本質があります。

右のイラストの①～⑤をすることで、どの子も腰を割り、心と体を開いて自己表現が出来るようになります。三宅太鼓は、大きく腰を割って横打ちをしますが、まずは据え置きで①～⑤を一人一人の児童に丁寧に指導し、基本を身につけるようにすることが近道です。三宅太鼓に限らず、すべての和太鼓の授業にこの導入はとても有効です。

8. 本時の展開（第1時）

	○学習内容 ・主な学習活動	◆教師の働きかけ ☆具体的評価規準
導入	○和太鼓についての基礎知識とばちの握り方、構え方の基本、打ち方について指導する。 ・和太鼓は真剣に打たなければいけないことを教師の話を通して知る。 ・ばちの握り方を知り、実際に握ってみる。	◆①和太鼓は牛と木の命が注がれた楽器であること②楽器は大切に扱うこと③硬いばちは危険を伴うものであること等を真剣に伝える。 ◆親指と人差し指で握る方法と、薬指と小指で握る方法の両方を教え、自分で選択させる。
展開	○腰を割った構えで体を開いて打てるようにする。 ・準備体操をする。 ・その場で全員で構えを練習する。 ・二人ずつ前に出てきて、実際に①～⑤を行う。	 ◆足を置く位置にテープで印をつけておく。
まとめ	○三宅太鼓の前半の唱歌を唱え、打ってみる。 ・太鼓を取り囲むようにして円になり、全員が順番に打つ。友達が打つときは、唱歌で応援する。	 ◆⑤では、ドンドンドンと3回打つ。 ◆「ツクドンツクドン ツクドンドン」まで。 ☆アー① ☆ウー①
	・整理体操をしてばちを片付ける。 ・よかったところを知り、次時の予告を聞く。	◆どの子も真剣に太鼓に向かっていて、大きな声で唱歌が言えたことなどをほめる。

私の指導案

森 由紀乃 立川市立立川第六中学校主幹教諭

題材名 わらべうたをつくろう
(中学校・第2学年)

題材の目標

わらべうたを構成している音の並びを理解し、言葉や音階の特徴を生かして旋律をつくる。

題材について

- ◆本題材に先立ち、器楽分野として篠笛の学習を行う。篠笛の学習の初期段階では教材としてわらべうたを扱うが、その発展的な題材として民謡音階の中の4つの音を使ってわらべうたの創作を行う。
- ◆本題材では、旋律の創作過程で生徒が音高を確認するために篠笛を活用している。

教具・教材

篠笛（個人持ち）
プラスチック製七本調子
『たこ たこ あがれ』『ほたるこい』
『ずいずいずこころばし』
『かごめ かごめ』等

指導の内容

- ◆日本の楽器（篠笛）の表現活動を通し、日本の音楽の中でも生徒にとって最も身近なわらべうたの音の構成について気づかせる。
- ◆生徒自らが幼少期からわらべうたを歌ってきた経験を生かし、わらべうたにふさわしい言葉や内容を考えながら旋律及び歌詞の創作を行う。

(共通事項)

- ア 旋律、形式、構成
- イ 拍、音階

学習指導要領

- ◆各学年の目標及び内容（第2学年及び第3学年）
2 内容A 表現（3）ア
言葉や音階などの特徴を生かし、表現を工夫して旋律をつくること。
- ◆指導計画の作成と内容の取扱い
2（2）和楽器の指導については、3学年間を通じて1種類以上の楽器の表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫すること。
- 2（3）我が国の伝統的な歌唱や和楽器の指導については、言葉と音楽との関係、姿勢や身体の使い方についても配慮すること。
- 2（5）創作の指導については、即興的に音を出しながら音のつながり方を試すなど、音を音楽へと構成していく体験を重視すること。その際、理論に偏らないようにするとともに、必要に応じて作品を記録する方法を工夫させること。

題材の評価規準

- （1）わらべうたの特徴に関心を持ち、ワークシートに示した創作の手順を参考にしながら、意欲的に活動している。（音楽への関心・意欲・態度）
- （2）わらべうたの言葉と旋律のかかわり合いを感じ取り、言葉の選び方や反復や終止などの構成を工夫して創作している。（音楽的な感受や表現の工夫）
- （3）自らがイメージするわらべうたらしい歌詞と旋律を創作し、歌うことができる。（表現の技能）

題材の指導計画と評価計画（2時間扱い）

	○学習内容 ●学習活動	◆評価規準 ◇評価の方法
第1 時 本 時	○篠笛の〈三、五、六、七〉の音だけで吹ける曲を探す(思い出す)。 ●この4音のみで吹ける曲はほとんどがわらべうたであることに気づく。 ○〈三、五、六、七〉の4音を使ってわらべうたの旋律をつくる。 ○旋律をイメージしながら歌詞を考える。	◆班ごとに、指定の4音で構成されているわらべうたを見つける(思い出す)ことができる。(関心・意欲・態度) ◇観察およびグループからの報告
第2 時	●歌詞として選んだ言葉と旋律のかかわり合いを考え、反復や終止の工夫をしながら、自らのイメージするわらべうたをつくりあげる。 ○創作わらべうたの発表会をする。	◆わらべうたらしい旋律や歌詞を自分たちなりにイメージし、工夫してつくろうとしている。(感受や表現の工夫) ◇観察 ◆作品を完成させ、グループ全員で歌うことができる。(表現の技能) ◇発表、相互評価、記譜(ワークシート)

本時の展開

	○生徒の活動 ●学習内容	☆教師の指導及び支援 ◆主な評価
導入 10分	○篠笛で既習曲『ほたるこい』を吹く。 ●『ほたるこい』に使われている音は〈三、五、六、七〉の4音のみであることを確認する。	☆構え方や運指、奏法の確認を行う。 ☆〈三、五、六、七〉の4音のみで吹ける曲を探す際に、「小さいときや小学生の頃、遊びながら歌っていたうた」を思い出してみるよう声かけをする。
展開 35分	○3～5人のグループをつくる。 ○『ほたるこい』のように〈三、五、六、七〉の4音のみで吹ける曲を探し（思い出し）、見つけたグループから教師に報告する。 ●〈三、五、六、七〉の4音のみで吹くことのできる曲は、日本のわらべうたであることに気づく。 ○〈三、五、六、七〉の音を用いて、8拍×4行の旋律を創作する。 ●8拍目や曲の終わりに使う音と休符の有無等によって、終わる感じがしたり先へ続く感じがしたりすることに気づく。 ○8拍×4行のリズムに合う歌詞（言葉）を考える。	◆グループで互いに意見を出し合い、課題に興味をもって意欲的に取り組むことができる。（関心・意欲・態度） ☆初めての旋律創作のため、手順を細かく示したワークシートを用いる。 ☆旋律創作は、笛を吹くことで実際の音高を確認しながら行う。ただし、まだ笛を自在に吹くことができず、実際の音高をイメージしないままワークシート上でのみ4音を並べているグループには、創作過程の旋律を教師が実際に笛で吹いて聞かせ、音のつながりを確認できるようにする。 ☆1拍分を示すマス目に〈三、五、六、七〉のいずれかの音と休符やのばしの記号を書き込む形で記譜を行う。
まとめ 5分	○おおよそできあがった旋律を笛で吹き、旋律と言葉のかかり合いや反復、終止音などについて次回さらに工夫を重ねた方がよいところを確認しておく。	◆ワークシートの手順を参考にし、8拍×4行の旋律とわらべうたとしてふさわしい歌詞を工夫しながらつくっている。（感受や表現の工夫）

指導の手だて

1. 題材構成・教材選択の工夫

- (1) 「言葉や音階などの特徴を生かし、表現を工夫して旋律をつくる」ことを目標とする創作活動において、器楽分野としての篠笛の学習を生かすため、わらべうたを教材とした。

わらべうたは、生徒にとって最も身近な日本の伝統的な音楽であり、生徒自らがわらべうたに親しんできた経験から「気づき」を中心とした学習を展開することができる。

- (2) 生徒の個々の音楽的技能に合わせて創作活動ができるよう、旋律を構成する音（民謡音階の中の4つの音）をあらかじめ指定するとともに、形式（拍数や反復をする場合のパターンなど）も既習曲にならっておおよその枠を定めておく。

2. 創造的な音楽活動の工夫

- (1) 3～5名のグループで活動し、互いにアイディアを出し合いながら工夫して創作活動ができるようにする。
- (2) 最終的には歌詞を伴うわらべうたとして完成させるが、旋律づくりと歌詞づくりのどちらを先に行うかは特に指定していない。生徒はそれぞれやりやすい順序で創作を自由に行う。

3. 指導と評価の工夫

- (1) 五線に頼らない記譜の方法を工夫することで、生徒のもつ感受性を生かすようにする。
- (2) 出来上がったわらべうたの発表会を行い相互評価することを通して、友達に認められる喜びが次の活動への励みとなるようにする。

●森先生からのコメント

創作分野について、これまで今ひとつ踏み込めなかった理由がいくつかあります。自分が和声や調性に関する指導に自信がもてないこと、音を確認するための音源の問題、記譜についてどうするか…などといった点です。篠笛を活用してわらべうたをつくるこの活動は、使う音をあらかじめ指定するなど、創作に対してポジティブに取り組むことができる内容になっています。ただし、創作したものを実際に歌う場合、生徒の声と楽器のキーが合いにくいというような改善点や課題もありますので、それらを考えながら実践を進めていきたいと思います。

私の指導計画

紫雲友紀子 千葉市立美浜打瀬小学校教諭

【第1学年の目標】			内 容												教			
			A 表現									B 鑑賞			A 表現		B 鑑賞	
			(1) 歌唱				(2) 器楽				(3) 読り	(1)			(4)		(2)	
			ア	イ	ウ	エ	ア	イ	ウ	エ	ア	イ	ア	イ	ウ	ア	イ	ウ
			範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりすること。	歌詞の表す情景や気持ちを感じ取り、思いをもって歌うこと。	自分の歌声及び発音に気を付けて歌うこと。	互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌うこと。	範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏すること。	楽曲の気分を感じ取り、思いをもって演奏すること。	身近な楽器に親しみ、音色に気を付けて簡単なリズムや旋律を演奏すること。	互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること。	声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをすること。	音を音楽にしていけることを楽しみながら、音楽の仕組みを生かし、思いをもって簡単な音楽をつくること。	楽曲の気分を感じ取って聴くこと。	音楽を形づくっている要素のかかり合いを感じ取って聴くこと。	楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲や演奏の楽しさに気付くこと。	共通教材を含めて、斉唱及び輪唱で歌う楽曲。	主となる器楽教材については、既習の歌唱教材を含めて、主旋律に簡単なリズム伴奏や低声部などを加えた楽曲。	我が国及び外国の文化や習慣、行事や踊り、行進曲や踊りの音楽など身体反応の快さを感じ取りやすい音楽。日常の生活に関連して情景を感じ取りやすい楽曲。
主な教材 ☆は鑑賞曲																		
学 期	題材名 (指導時数)	ねらい																
前 期	うたでともだちをつくらう (15 時間)	・友達と一緒に歌ったり身体表現をしたりする楽しさを感じ取る。	◎	◎	○	○							○			そうさんのさんぼ てと てで あいさつ ☆みっきいまうす マーチ ひらいた ひらいた		
	おんがくにあわせてあそぼう (16 時間)	・歌ったり体を動かしたりして、拍の流れや拍子の違いを感じ取る。 ・拍の流れを感じながら簡単なリズムを表現する。	◎	○		○				○	○	◎	○			☆せいじゃの こうしん ☆たぬきの たいこ かたつむり じゃんけんぽん けんけん ば うみ		
	リズムであそぼう (6 時間)	・歌ったり体を動かしたりしてリズムフレーズを感じ取る。 ・拍の流れに乗って、簡単なリズムを演奏したり、即興的につくったりする。	○	◎			◎		○		○	◎	○		○		☆しろくまのジェンカ ぶん ぶん ぶん	
後 期	いいこえ いいおと みつけよう (8 時間)	・声の出し方に関心をもち、きれいな発声、発音で歌える。 ・音の響きの違いに気づいたり、音の出し方を工夫したりして、音に関心をもち、鍵盤ハーモニカの奏法に親しみ、簡単な旋律を演奏する。			○	◎		○	○	◎			○	◎		ひのまる どんぐりさんのおうち ばす ばす はしる ☆かえるの ルンバ		
	ようすを おもいうかべて (10 時間)	・歌詞の表す様子を思い浮かべて、歌い方を工夫する。 ・歌詞や絵から自分の思いをもって音をつくったり、音楽の仕組みを生かして、簡単な音楽をつくったりする。 ・楽曲の気分を感じ取って、想像豊かに聴く。			◎	○			◎		◎	◎	○		◎	おおきなうた 絵本「ころころころ」より はる なつ あき ふゆ ☆おどる こねこ		
	みんなであわせて たのしもう (15 時間)	・拍の流れを感じ取って、互いの声や音を聴きながらきれいな声や音で歌い合わせたり、合奏することができる。			○		◎	○			◎					とんくるりん ばんくるりん こいぬの マーチ (6年生を送る会発表曲) 6 年生に送る歌		

●紫雲先生からの コメント

指導計画

- ・ **変わらない点**：表現と鑑賞を結び付け、バランスよく行う。
- ・ **変わった点**：題材の目標に結び付く音楽遊びを取り入れ、子どもの発想を生かすとともに子どもたちが音楽を特徴づける要素や音楽の仕組みに気づき、表現や鑑賞の中で活用できるようにしました。そのため、1 題材にかける時間数が増えました。

材	評価の対象				題材の評価規準	
備考	内容の まとめ				ア：音楽への関心・意欲・態度 イ：音楽的な感受や表現の工夫 ウ：表現の技能 エ：鑑賞の能力	今月の歌 集会 行事
	歌 唱	器 楽	音 楽 つ く り	鑑 賞		
(共通事項) ※音楽遊び など						
拍の流れ 強弱 ※音楽の心臓を キャッチ	◎			○	ア. 友達と一緒に歌ったり歌に合わせて遊んだりして、音楽活動を楽しんでいる。 イ. 楽曲の気分を感じ取って、身体表現や歌い方を工夫している。 ウ. 声をそろえて歌ったり、音楽に合わせて身体表現をしたりしている。 エ. 体を動かし、拍の流れを感じ取りながら聴く。	4 月の歌 「校歌」 1 年生を迎える会 『さんぽ』 『もりの くまさん』
拍の流れ 2 拍子と 3 拍子 フレーズ ※どんなにはなれていても ※波を感じて ※波の合奏	◎		○	◎	ア. 音楽に乗って歌ったり、体を動かしたりすることを楽しんでいる。 イ. 拍の流れや楽曲の気分を感じ取って、歌い方や身体表現を工夫している。 ウ. 拍の流れに乗って、体を動かしたり拍打ちやリズム打ちをしたりしている。 エ. 2 拍子と 3 拍子の音楽の気分の違いを感じ取りながら聴く。	5 月の歌 音楽集会 『あの青い空のように』 6 月の歌 『ともだち賛歌』 7 月の歌 音楽集会 『エーデルワイス』
拍の流れ リズム 強弱 反復 問いと答え ※まねっこリズム ※リズムでおはなし タンブリン/カスタ奏法	○	○	◎	○	ア. 音楽に合わせて歌ったり、リズムを表現したりしようとしている。 イ. 歌詞の表す様子を思い浮かべて、歌い方や身体表現の仕方を工夫している。 ウ. 拍の流れに乗って、手拍子やタンブリンなどでリズムフレーズを演奏したり、 簡単なリズムフレーズを即興でつくったりすることができる。 エ. 様子を思い浮かべて聴いたり、リズムフレーズを感じ取ったりしながら聴く。	9 月の歌 音楽集会 『ドレミのうた』
音色 拍の流れ 鍵盤ハーモニカ奏法 ※ドレミしりとり ※音楽室楽器探検 (様々な打楽器)	◎	◎	○	○	ア. 声や楽器の音色に関心をもち、進んできれいな歌声で歌おうとしたり 音色に気をつけて楽器の音を出そうとしたりしている。 イ. 楽曲の気分を感じ取って、声の出し方や音の出し方を工夫している。 ウ. 旋律を階名で暗唱し、鍵盤ハーモニカで演奏することができる。 エ. 楽曲の気分や楽器の音色、響きのおもしろさを感じ取って聴く。	10 月の歌 『君をのせて』 11 月の歌 『もみじ』 芸術鑑賞会 (四重唱)
音色 強弱 速度 反復 問いと答え ※にんぼうおとになる ※かえうたあそび ※名探偵はだれだ	◎	◎	◎	◎	ア. 「こう表現したい」という思いをもち、進んで表現しようとしている。 イ. 歌詞や絵から様子を思い浮かべて、表現を工夫している。 ウ. 楽曲のイメージや自分の思いが伝わるように表情豊かに歌ったり、 楽器を演奏したりしている。 エ. 楽曲の気分の変化を感じ取ったり、場面の様子を想像したりしながら聴く。	12 月の歌 『もみの木』『お正月』 1 月の歌 『世界がひとつになるまで』 2 月の歌 6 年生を送る会 『Believe』
拍の流れ 拍子 音色 反復 フレーズ 鉄琴奏法	◎	◎			ア. 友達と音を聴きあい、協力して演奏しようとしている。 イ. 歌詞の様子を思い浮かべたり、楽曲の気分を感じ取ったりして、 表現の仕方を工夫している。 ウ. 友達の歌声や楽器の音を聴きながら、息を合わせて演奏している。	お別れ式の歌

私の指導計画

澤 雅枝

練馬区立光和小学校教諭

第5学年

音楽科の目標

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。

第5学年及び第6学年の目標

- (1) 創造的に音楽にかかわり、音楽活動への意欲を高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。
- (2) 基礎的な表現の能力を高め、音楽表現の喜びを味わうようにする。
- (3) 様々な音楽に親しむようにし、基礎的な鑑賞の能力を高め、音楽を味わって聴くようにする。

【音楽としてかかわる学校生活】

音楽集会

全校 4/23 校歌 9/24 ゴーゴーゴー・歌えバンバン 12/4 歌は友達
 高学年 6/18 Believe 10/22 君をのせて
 低学年 9/3 さんぽ 1/14 わらべうた
 学年朝会 4/20・5/18・6/15・6/29・7/13・8/31・9/14・10/26・11/9・11/30・1/25・2/8・2/22・3/8

行事

1年生を迎える会 4/16 崖の上のポニョ 運動会 10/4 ゴーゴーゴー
 移動教室 8/31～9/2 燃えるよ燃える・遠き山に日は落ちて・翼をください
 校内音楽会 12/11・12 6年生を送る会 2/26 ベストフレンド
 卒業式 3/25 旅立ちの日に
 音楽鑑賞教室 10/9 (オーケストラ)

時数	題材名	教材	題材のねらい	題材の評価規準	
				ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫
4	心をこめて	心から心へ ゆかいに歩けば 星条旗よ永遠なれ	曲の構成について知り、歌詞の内容や構成を感じ取りそれを生かした歌い方を工夫する。	歌詞の内容や楽曲の特徴に関心をもって聴いたり歌ったりしようとしている。	歌詞や楽曲のよさを感じ取り、曲想表現を工夫している。
12	音の重なり	茶色のごびん こきょうの人々 ハンガリーラプソディ ニールセンの マイスタージンガー 威風堂々	旋律と和音や低音がつくる音の響きを感じ取って表現する。	音の重なり合う美しさを求め友達と協力しながら進んで活動しようとしている。	音のかかわり合いによって生み出される様々な響きを感じ取ったり、和音の美しい響きを味わったりして表現を工夫している。
4	日本の音めぐり	さくらさくら こいのぼり 子もり歌 谷茶前 涙そうそう 君が代	表現や鑑賞を通して、日本の音楽に親しむ。 箏の演奏方法がわかり親しむ。	日本の様々な音楽に関心をもって聴こうとしたり表現しようとしている。	日本の旋律の特徴を感じ取って、曲想に合った表現を工夫できる。
6	人の声の魅力	赤とんぼ 待ちぼうけ 流浪の民 花のおくりもの こげよマイケル	様々な形態による合唱の鑑賞を通し、声の種類を知り、声へのあこがれと、自然で無理のない声で歌う楽しさを学ぶ。	いろいろな合唱形態に関心を持ち、聴いたり歌ったりしている。	自然で無理のない声の響き方をつかみ、曲想を生かした表現を工夫している。
12	声の重なり 心の重なり 日本の音楽 (校内音楽会)	レッツサーチフォー トゥモロー 冬景色 ふるさと 合奏曲 八木節 交響詩モルダウ	呼吸方法に気をつけ、歌詞や楽曲のよさを生かして合唱する。 歌詞や楽曲の構成、伴奏の響きから感じ取った様子や心情を生かして、表情豊かに表現する。 箏の響きを感じて音の重なりを楽しむ。	自分自身の表現意図をもちながら、友達と協力し合い表現に取り組もうとしている。	楽曲の特徴や歌詞のもつ情景を生かした歌唱表現の工夫をしている。 楽曲の構成や音色の組み合わせのよさを生かして演奏しようとしている。
2	雨の音楽をつくらう	雨の樹	音楽づくりに関心をもち、友達と協力して音楽をつくらうとする。	それぞれの役割の違う4人での即興に関心をもち、意欲的に音楽をつくらうとしている。	それぞれのパートの響きを感じ取り、音の組み合わせを工夫している。
10	豊かな表現	星の世界 ピアノ五重奏曲「ます」 スキーの歌 威風堂々 旅立ちの日に クラス合奏 (Believe 少年時代 翼をください 瞳をとじて)	楽器の響き合いの美しさや、表現の多様性などアンサンブルの魅力を味わって演奏する。	重なり合う楽器の音色の美しさを感じ取って演奏している。	歌詞の表す情景や気持ちを想像して歌ったり、楽曲全体の流れの中で旋律やリズムの変化、音の重なりを感じ取って、それらを生かした工夫をしている。合わせることに意識をもち、合わせるための工夫をしている。

●澤先生からの
コメント

指導計画

- ・ **変わった点**：（共通事項）や学習の中で子どもたちに身につけさせたいそのほかの音楽用語・要素などを「音楽のキーワード（（共通事項）を含む）」としています。
- ・ **今後の改善点**：今年度は校内音楽会が開催されるので、既習の楽曲の表現が中心になっていますが、来年度の指導計画では偏った点を補いたいと考えています。

			A 表現								B 鑑賞			A 表現			B 鑑賞			音楽の キーワード （（共通事項）を 含む）		
			(1) 歌唱				(2) 器楽				(3) 録り	(1)			(4)			(2)				
			ア	イ	ウ	エ	ア	イ	ウ	エ	ア	イ	ア	イ	ウ	ア	イ	ウ	ア		イ	ウ
			イ短調の楽譜を見たりして歌うこと。	歌詞の内容、曲想を生かした表現を工夫し、思いや意図をもつて歌うこと。	呼吸及び発音の仕方を工夫して、自然で無理のない、響きのある歌い方で歌うこと。	各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴いて、声を合わせて歌うこと。	イ短調の楽譜を見たりして演奏すること。	曲想を生かした表現を工夫し、思いや意図をもつて演奏すること。	楽器の特徴を生かして旋律楽器及び打楽器を演奏すること。	各声部の楽器の音や全体の響き、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること。	様々な発想をもつて即興的に表現すること。	音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、見通しをもつて音楽をつくること。	曲想とその変化などの特徴を感じ取って聴くこと。	音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取り、楽曲の構造を理解して聴くこと。	音楽を聴いて想像したことや感じたことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさを理解すること。	主となる歌唱教材については、各学年ともウの共通教材の中の3曲を含めて、斉唱及び合唱で歌う楽曲。	考慮し、簡単な重奏や合奏にした楽曲。	共通教材	和楽器の音楽を含めた我が国の音楽や海外の音楽など文化のかかわりを感じ取りやすい音楽。人々に受け入れられている音楽。いろいろな種類の楽曲。			
ウ 表現の技能			エ 鑑賞の能力																			
声の響き合いを感じ取りながら、自分の表現を実現して歌っている。			楽曲の特徴を感じ取って聴くことができる。			○	◎		○						○				◎		楽曲の構成 二部形式 フレーズ レガート スタッカート	
旋律の流れ、低音や和音の動きなどの要素を感じ取ったり、それらの相互のかかわりをとらえたりして演奏している。			低音の音の動きや魅力、ハーモニーの重厚な響きや魅力を聴き取ることができる。						○			◎	◎			○			◎		低音部記号 和音の響き 音の重なり Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅴ7 調・ハ長調	
日本の音階の特徴的な響きを感じ取り、方法に気をつけて演奏している。			我が国の様々な音楽に親しみ、それぞれの楽曲の特徴を感じ取って聴く。			○	○				○		◎		○		○	◎			音階・旋法 問いと答え	
声の響き合いを感じ、拍の流れに乗り楽曲の特徴や曲想を生かして演奏している。			人の声の様々な種類や特徴を理解し、合唱音楽のよさや美しさを感じて聴いたり、味わったりできる。			○		◎	○						○		○		◎		音色 ソプラノ・ アルト・テノール・ バリトン・バス	
友達の歌声や演奏を感じ、他のパートを聴き、表情豊かな表現ができるように工夫をして演奏している。			音楽のもつ情景が場面場面ごとに変化していくことに気づき音楽の構成と変化の根拠を見つけて聴くことができる。				○	◎	○		○	◎	○		○	◎	○	○	○		強弱記号 レガート スタッカート 音楽の構成	
4つのパートの役割を生かして、まとまりのある作品をつくることができる。			ドローンやパターンの繰り返しを聴き取ったり作品全体の響きのおもしろさを感じ取って聴く。											◎		○				○	ドローン 拍・強弱 リズム	
拍の流れに乗り、旋律のまとまりやリズムの変化に気をつけながら、楽曲の特徴や曲想を生かして演奏している。			主な旋律の反復や変化、さらに旋律と旋律のかかわり合いなどを感じ取りながら楽器の音色や特徴を味わって聴く。			○	○	○	◎			○	◎		◎		○	○	○		変奏曲 （反復・変化） 強弱記号 縦と横の関係	